

古代中国の貨幣の起源

古 川 顕

要旨

古代中国、なかでも春秋戦国時代は、中国の長い歴史の中でも注目すべき激動の時代であった。春秋戦国時代の大きな特色の一つは、従来の青銅器製造技術が高度に発達して鉄製農具が出現し、牛を使って畑を耕す牛耕農業が出現したことである。牛耕農業の出現・普及は華北の農業生産力を飛躍的に発展させ、その農業生産力の発展を土台にして商取引の発展を促した。商取引の発展は、商取引を円滑にする度量衡、貨幣、文字の全国的統一をもたらした。古代中国の貨幣の起源を考察・検討するときにしばしば逢着するのは貝殻、とりわけ子安貝である。子安貝は古来より世界的に注目されてきた貝殻であるが、なかでも古代中国の殷・周時代や春秋戦国時代などに貨幣として使用されたとされている。子安貝は、いわゆる貝貨の典型的な事例である。そうした古代中国の貨幣の発展を対象として、「近代考古学の父」と称される浜田耕作の、古代中国の貨幣の起源を子安貝に求める独創的な考え方がある。

キーワード：子安貝、寶貝、貝貨、始皇帝、浜田耕作

目次

はじめに

I 古代中国の貨幣

II 古代中国における貨幣の誕生

III 浜田耕作と古代中国の貨幣

おわりに

はじめに

筆者はこれまで、「アリストテレスの貨幣起源説」(古川 [2017])、「イネスとケインズの貨幣論」(同, [2018])、「クナップの貨幣国定説」(同 [2018])、

「原始貨幣と貨幣の起源」(同 [2018]), 「貨幣の起源と貨幣の未来」(同 [2019]) といった論稿を通じて内外の貨幣起源説について検討してきた。しかし、古代中国の貨幣の起源について触れる機会はまったくなかった。筆者は中国語がまったく読めない。当初は、古代中国の貨幣の起源を探究することは到底無理なのではないかと思ったものである。ところが幸いなことに、さまざまな文献を手にとっているうちに、古代中国を取り扱った日本語の文献が数多くあることが理解できるようになった。本稿は、そうした古代中国を取り扱った多くの優れた日本語の文献に即して考察した成果である。

そうは言っても、貨幣の起源について検討・分析することは思った以上に難しい。これまでに数多くの文献や考え方があり、どれが最も妥当でリーズナブルな考え方であるかを明らかにすることは、初めて古代中国関連の文献に接する筆者には容易ではないからである。以下では、興味深い多くの文献の渉猟を通じて「古代中国の貨幣の起源」について考察した筆者のささやかな見解・成果を提示することにしよう。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第Ⅰ節では、「古代中国の貨幣」と題して春秋戦国時代に代表される古代中国を中心として、貨幣としての子安貝の役割について検討する。第Ⅱ節では、「古代中国における貨幣の誕生」というテーマのもとに、子安貝が古代中国において貨幣として登場したプロセスについて分析する。第Ⅲ節では、「近代考古学の父」と称される浜田耕作の見解を軸にして古代中国の貝貨、なかでも子安貝について考察する。最後に「おわりに」として、これまでの検討・分析の結果を要約する。

I 古代中国の貨幣

古来より世界的に注目されてきた貝殻がある。子安貝（タカラガイあるいは寶貝とも呼ばれる）という貝殻である。子安貝は、タカラガイ科の巻貝の総称であり、その光沢のある美しい貝殻は昔から世界各国で腕輪や首飾りな

どの女性の装飾品として用いられ、呪物や護符としても使われてきた。「中国考古学のパイオニア」とされるアンダーソン (J.G. Andersson) は、『黄土地帯』(完訳新版) (*Children of the Yellow Earth*, 1934) という著書の中で、子安貝についてさまざまな観点から興味深い指摘を行っている。

アンダーソンによれば、人類の歴史に特異な役割を演じたのは2種類の小型の子安貝であり、その中でも最も重要なのがキプレア・モネタ (*Cypraea moneta*)、他の一つはキプレア・アンヌルス (*Cypraea annulus*) である。2種類の子安貝ともインド洋沿岸と太平洋の西岸に棲息し、これらはアフリカの東海岸と太平洋の島嶼にも見られる。モネタとアンヌルスは紅海 (Red Sea) にも棲息し、古代のエジプト人や地中海諸民族は、紅海からそれらを得ていたとされている。アンダーソンはまた、「中国と日本の子安貝の供給に関しては、とくに注目される」(Andersson [1934], 邦訳320ページ) として、ヴェネチア共和国の商人・旅行家であり、『東方見聞録』の著者としても知られるマルコ・ポーロ (Marco Polo: 1254~1324) について触れ、マルコ・ポーロが13世紀に中国・雲南省で子安貝が貨幣として使用されていたのを知っていたこと、そしてキプレア・モネタは日本の琉球 (沖縄) にも産する⁽¹⁾と指摘している。

(1) 日本の民俗学の確立に寄与したとされる柳田國男 [1967] は、その著「宝貝のこと」(『海上の道』所収) において次のように述べている。「沖縄諸島のように首飾りの習俗が久しく伝わり、これに宗教的関心を寄せ続けていた社会において、どうしてまたあの様に手近に豊富に産出し、かつあれほど美しく、変化の奇を極めていっているといつてよい宝の貝を、わざと避けたかと思うばかり、利用の外にしていたのかということが説明せられねばならぬ。あるいはあまりにも豊富に過ぎ、珍とするに足りなかったからとも考える人があろうが、さまざまな木の実草の実の、もっとありふれた物をさえ島人は珠に貫いている。察するにこれは織る者は着ず、耕す者は食わずの古い諺のごとく、島々に分かれ住した貧しく力微なる人々にとって、自ら愛用すべくあまりにも貴重なる宝の貝であった故に、それを自分の首飾りにすることのできぬ年月が長かったためであろう」(193ページ)。「今から顧みれば、同じ上代に属するものとも言えるであろうが、かつて金銀の冶鑄せられず、山が照^{かがや}り耀く石を未だ掘り出さしめなかった期間、自然に掌上に取り上げられるものとし

アンダーソンは、中国で出土する子安貝（およびその模造品）についてこう指摘する。「古墳から出土する子安貝とその模造品は、仰 韶 期^{ぎょうしょう(2)}から紀元前後の頃まで、中国では副葬品として広く用いられていた。世界各地の子安貝の葬送儀礼の研究をしてみるなら、この小さな貝がいかに古代の人類史に深く根ざしているかが分かるだろう」（*Ibid.*, 邦訳322ページ）。アンダーソンによれば、副葬品としての子安貝の最初の発見は旧石器時代後期に遡り、フランス・ドルドーニュ（Dordogne）のヴェゼール溪谷（Vézère Valley）に散在する洞窟群から、地中海産の2種類の子安貝が人骨と一緒に出土したことに由来する。さらにエジプト前期王朝の墓からは、キプレア・モネタとキプレア・アンヌルスが出土しており、クレタ島では黒海産の子安貝が発見されている。この他、インドでは先史時代の堆積層から、石器、火打石、メノウ、金属、土器断片とともに、数個のキプレア・モネタが出土している。このキプレア・モネタはコーカサス北部のクバン墓地、キエフ付近ではスキ

ては、寶貝より目ざましく、あでやかなる物は他になかった。すなわち強力なる中原の王者は、万策を講じて遠い海の果てからこれをたぐり寄せ、あるいはまたこれを無形の武器として、広大な地域を征服し得たのも、すでに悠々たる三千年以上の昔のことである。この第一期の財宝の原産地が、果たして世界にいくつあったか、私たちはまだ究めることができずにいるが、少なくとも支那で東亥といいた島亥といった方面において、その最も明らかな痕跡を永く留めたのは沖縄の諸島である」（同）。以上のように柳田國男は、沖縄諸島や中原の王者としての「三千年以上の昔」の古代中国（支那）において、寶貝（タカラガイ、子安貝）が装飾品として用いられたとの事実を指摘する。

なお、日本におけるキプレア・モネタの産地は、房総半島、紀伊半島、高知、沖縄であり、その種類は、大型の *Cypraea vitellus*（和名はホシキヌタ）である。日本では貝貨として使用された証拠はなく、貝塚から出土した例もないとのことである。これについては、アンダーソン（J. G. Andersson）の *Children of the Yellow Earth*（Translated by E. Classen, London, 1934）（松崎寿和訳『黄土地帯』1987、六興出版）を参照されたい。

- （2）仰韶期とは、およそ紀元前5000年から紀元前3000年までの時代を指し、黄河流域全域に存在した新石器時代の文化を仰韶文化と呼んでいる。この文化の名称は、初めて出土した代表的な村である仰韶にちなんでいる。

タイ人の墓からも発見されている。この例に見られるように、子安貝は世界各地の古墳から出土しているのである (*Ibid.*)。

以上は古墳出土の子安貝の例であるが、現代の葬送儀礼の例として、インドでは葬送のとき自宅から墓地までの道筋に子安貝を撒く習慣があり、フランス領トーゴランド (Togo français: アフリカ西海岸、ギニア湾に面した共和国。1960年にトーゴ (Togo) として独立した) では、親戚や知人の埋葬のとき死者のために食物や棕櫚酒を買ってやったり、黄泉^{よみ}の国へ案内してくれる渡し守に渡し賃が払えるように、墓の中にたくさんの子安貝を入れる慣習があったという。ウガンダでは呪術を伴う特異な形式が報告されている。酋長を埋葬した場合、5 か月経って墓をあばき、胴と頭を切り離し、下顎をはずして、クリーニングのために蟻塚の上に置く。蟻が顎骨をきれいにすると、ビールやミルクで洗い、樹皮製の布でくるみ、バターを塗り、小珠や子安貝で飾る。こうして飾られた顎骨は、最後にわざわざ建造した特別な祠に納められる (*Ibid.*, 邦訳324-325ページ)。

また子安貝は、各民族の間で女性の装飾品として広く用いられている。ビルマ (現在のミャンマー (Myanmar)) のタウンダ族の女性は、子安貝で飾ったスカートをはいている。インドには多くの例があり、ナグプル州のプリンジャリー族の女性は衣服に子安貝を縫い付け、パンジャブ (Punjab) では女性がキプレア・アンヌルスを用いている。南インドのトーダ族の女性は、子安貝で飾った腕輪や首飾りを付けてと言われている。アフリカにもこのような例が多い。ティベステイ族の女性も全身をこの貝で飾り、ジョロッフ族の女性は帯に縛り付ける。クフ族の女性は、山羊や羊の皮の房に結びつけて腰の回りに下げているなど、装飾品として子安貝を用いる例はいくらでもある。カメルーン (Cameroon) では、女性が200個もの子安貝を頭髮に付け、モロッコの酋長の娘はこの貝で飾っていた。それどころか、子安貝は妊娠とも関連しているとされる。「子安貝は、また妊娠と関連している。これに関する例

はアフリカに数多く見られる。トーゴランドでは、危険を防ぐために妊婦がたくさんの子安貝を用いている。……インドにも子安貝と妊娠に関連した例があるが、最も興味があるのは日本のそれである。日本では、子安貝は子供の誕生と密接に結びついていて、この貝に子安貝という特別な名称が付いているほどである。妊婦は陣痛の間これを掌に握りしめている」(Ibid., 邦訳329ページ、傍点は引用者)。スウェーデン人のアンダーソンが日本の妊婦の実態をこれほど正確に理解していたかと思うと驚かざるを得ない。⁽³⁾

以上、Andersson [1934] に即して副葬品としての子安貝および葬送儀礼としての子安貝について言及したが、アンダーソンはさらに護符としての子安貝の役割により大きく、より深い神秘的な意義があるという考え方についても紹介している。⁽⁴⁾しかし子安貝が大きくクローズアップされたのは、それが貨幣の役割を果たしてきたことによるとされている。彼は次のように指摘する。「中国の原始時代の殷代には、子安貝は貨幣として最も一般的だった。後にこの貝殻は金属製の模造品に代わり、さらに時代が下がると、まったく別のモノかたどを象った金属貨幣になった。それにもかかわらず、辺境地区では数世紀の間、貨幣としての地位を保ち続けた。先に触れたように、雲南地方ではマルコ・ポーロの時代まで子安貝が使用されていた」(Ibid., 邦訳325ページ)。「日本で子安貝が貨幣として使用されたかどうかは不明だが、子安貝の日本名タカラガイ(寶貝)という名称は、中国語の貝と同じ価値と観念を示している」(Ibid. 邦訳同ページ)。「ビスマルク諸島、ニューヘブライド、ニューカレドニア、ハワイなどの太平洋の島々では、貨幣として子安貝が広く使用

(3) 筆者が調べたところ、日本では子安貝(タカラガイ)は「安産のお守り」とされ、生命の誕生と再生のしるしとして尊ばれてきた地域があったことは確かなようである。ただし、「妊婦は陣痛のあいだこれを掌に握りしめている」か否かについては確かではない。

(4) Andersson, J. G. *Children of the Yellow Earth* (『黄土地帯』(松崎壽和訳, 1987, 326ページ)を参照されたい。

古代中国の貨幣の起源

されてきた。インドでは紀元前後の頃から用いられていたらしく、4世紀の法顕の『仏国記』にもそれを窺うことができる。13世紀には子安貝はベンガルの主要通貨だったし、ヒンドスタンでは18世紀まで通用していた。今世紀(20世紀)まで、インドでは土地売買に使用されていた。アフリカの赤道直下の諸地方でも、ごく最近まで貨幣として広く使用されていた」(*Ibid.*, 邦訳325-326ページ)。以上、子安貝についての世界的分布についてその概要を説明したが、以下では本稿のテーマである「古代中国の貨幣の起源」に的を絞って、古代中国における貨幣としての子安貝に論究することにしよう。

古代中国における貨幣の起源としてさまざまな考え方がある。先ず次のような見解を紹介しよう。春秋戦国時代(B.C. 770年～B.C. 221年)は、古代中国の長い歴史のなかでも注目すべき激動の時代であったことはよく知られている。この時代はまさに群雄割拠の戦乱の時代であり、周王朝(紀元前1050年頃～紀元前256年)の凋落につれて各地の諸侯が500年以上にわたって興亡を繰り返した。その一方、春秋戦国時代は優れた学者・思想家が輩出したことで知られている。孔子、老子、莊子、墨子、孟子、荀子、韓非子などの春秋戦国時代に現れた偉大な学者・思想家は「諸子」と呼ばれ、儒家、道家、墨家、名家、法家などの学派は「百家」と言われた。周知のように、こうした春秋戦国時代に現れた学者・思想家・学派は総称して「諸子百家」と呼ばれている。

春秋戦国時代におけるもう一つの大きな特色は、従来の青銅器製造技術が高度に発達した結果として鉄製農具が出現し、牛耕が出現したことである。牛を使って畑を耕す牛耕農法の普及は、鉄製農具の普及と結びついている。鉄製の三角形の刃先を持つ^{すき}犁を1～2頭の牛に引かせ、人間の労力を節約しながら深く耕すことができるようになり、こうした鉄製農具および“牛耕農法”の出現・普及は、華北(一般的には中国北部地域の呼称であるが、通常、^{わいが}淮河以北一帯を指すことが多い)の農業生産力を飛躍的に発展させ、大きな

生産力の増大をもたらすとともに、農業生産力の発展を土台にして商取引も発展した。商取引の発展は、当然のことながら、商取引を円滑にする貨幣の発達を促した。そのため、次のように指摘されている。「このような商取引の交換手段として貨幣も発達した。殷・周時代における貨幣は子安貝を用いた貝貨であるといわれるが、春秋時代になると青銅製の貨幣が現れ、戦国時代には種々の貨幣が流通した。その主なものを挙げると、山西地方を中心とする空首布、尖足布、方足布、円足布などの布銭があり、これは農具の銭を模したものといわれ、その銘文に……いずれも製造された都邑の名称が記され、これによって各都邑別に布銭の鑄造が行われたことが分かる」（西嶋[1981] 51ページ）。この引用文で貝貨とあるのは、いうまでもなく貝殻を用いた貨幣のことである。貝貨としてよく知られているのは、子安貝（寶貝、タカラガイともいう）であり、子安貝は豊作、繁栄、再生、富などを象徴し、なかでもキイロダカラ（*Monetaria moneta*）とハナビラダカラ（*Monetaria annulus*）がアジア、アフリカ、オセアニア、アメリカなど広範な地域で用いられた。とりわけ殷では、東南アジアとの交易で子安貝を入手し、それが国内で贈与の交易や埋葬品に用いられ、その単位として「朋」が定められている。ここで「朋」とは、5個の子安貝を糸でつないだものであるが、それが亀甲とともに殷末から周にかけて貝貨として貴重とされ、後には石、骨、銅などで貝貨を模した倣製品（倣貝）としての貨幣も作られた。楚は子安貝を模した銅貨を作り、新の王莽（紀元前45～23年）は貝貨制度を復活させたとされている。

そして郡県制が中国全土にわたって施行されるとともに、度量衡・貨幣・文字も統一されることになった。ここで郡県制とは、全国を郡と県に分け、それぞれに皇帝が任命する官吏を派遣する制度であり、周の封建制に代わって導入された中央集権的な制度であって、戦国時代を統一した秦の始皇帝によって中国全土に採用された。全国を36の郡に分け、それぞれの郡には長官

古代中国の貨幣の起源

として守、副長官として丞^{じょう}、郡の指揮官として尉^い、監察官として監が置かれた。さらに郡をいくつかの県に分けて統治した。この郡県制が、秦の中国統一政策の中で最も重要な政策であったと考えられる。⁽⁵⁾

こうした郡県制の施行と並んで、始皇帝の治世においてとりわけ重要なのは、度量衡、貨幣および文字が全国的に統一されたことである。こう指摘されている。「郡県制の全国的施行とともに、度量衡、貨幣、文字も統一された。従来、戦国の諸国ではそれぞれ独自の度量衡が使用され、貨幣もまた諸国によって、布銭^{ふせん}、刀銭^{とうせん}、円孔銭^{えんこうせん}など重さも形も相違する各種各様のものが流通していた。これでは統一国家の財政政策や社会生活にきわめて不便である。そこで始皇帝は度量衡の単位を一定し、その標準器を製造して各地に分配した。現在残っている秦量とか秦権といわれる標準の枬^{ます}とか秤がそれである。度すなわち長さの単位も当然統一された。従来は八尺を一步と定めた場合もあったのを、すべて6尺を一步と定めたのもこのときのことである。……また、各種各様の形態をもった従来の貨幣は、このとき半両銭という貨幣に統一された。半両銭とは、一個の重さが半両（約8グラム）で、その形態は中央に四角な穴のある円形の青銅貨である。この円形方孔銭という形態は、その後長く中国の鑄造貨幣の基本とされたのみならず、朝鮮・日本でも踏襲された」（西嶋 [1997] 55-56ページ）。

以上のような中国における貨幣の起源についての西嶋 [1981]、同 [1997]

(5) 郡県制の統治原理は、国家が個人または家族を直接支配することであり、そのためには、氏族共同体（宗族）が分解していることが前提であった。そのような状況は、春秋戦国時代を通じて鉄製農具と牛耕の普及による農業生産の発達によって、村落における大氏族を分解させ、家族と個人を自立させることによって生み出されていた。また大規模な開拓や灌漑事業は、より広範囲の地域を支配する統一権力と同時に、それを支える官僚制が必要であった。そのような社会状況のもとで、封建制に代わってとられた統治システムが秦の始皇帝の郡県制であった。ただし、秦の郡県制は急激な全国的施行が反発を受け、完全に実施されるまでに至らずに秦は滅亡した。

における見解に対して、中国における貨幣の起源を子安貝に求めるより踏み込んだ具体的な考え方もいくつかある。その一つが、白井〔1977〕における次のような考え方である。白井〔1977〕は、第1章冒頭で次のように説明する。「貝と人類との出会いは先史時代にまで遡る。その証跡は、世界中に残る新石器時代（約1万年前以降）の遺跡に見出せるが、旧石器時代中期（約4万年前）に出現した「現生人類」（ホモ＝サピエンス（*Homo sapiens*）の時代に、すでに貝は利用されていたことは容易に窺える。ひょっとすると旧石器時代早期（約200万年前）に出現したとされる人類の遠い先祖——「猿人」（アウストラロピテクス類（*Australopithecus* spp.）も、貝と関わりをもっていたのではないか？。チンパンジーですら石を用いてモノを砕いたり、細い枝を使って穴の中に隠れている虫をはじく能力を持っている。湖や川辺に見られる二枚貝や巻貝類を、「猿人」たちは食用として採取していたことは容易に考えられる。彼らは“礫”^{れき}で作った石器を使用していたので、これを使って貝殻を砕き、その中の身を取り出すことは可能である」（白井〔1997〕7ページ）。「大昔の原始社会の時代には、当然、貨幣は存在しなかった。モノとモノとを交換する“物々交換”によって、人々は必要な物資を手してきた。米と魚、野菜と布、鉄と毛皮など……。ところが、米は重いし野菜はかさばる。魚は、遠方へ運ぶとすぐに腐る……。などと、不都合なことが多かった。そこで古代人は、稀少性や美的感覚から珍重してきた貝装飾品に目を付けた。これなら価値は高く、少量でそれらと交換することができる。そこで“貝”と“モノ”との交換が始まった。そして貝は、恰好の交換媒体となった。なかでもタカラガイ類は、古来、呪詛^{じゅそ}的な意味から世界各地で貴重視され、装飾品として利用されてきた。当然、他の装飾品よりも価値は高かった。しかもサイズは小さく、粒はほぼ揃っており、取扱いが簡便である。材質は堅牢で、その上、美しいこともタカラガイ類が貨幣として利用されるようになった主要な理由である」（同、68⁽⁶⁾ページ）。

さらに白井 [1997] は、貝貨使用の目的としてこう指摘する。「発生初期における貝貨使用の主目的は、交易の媒体（仲介物）や物品取得の代価としてではなく、権力の象徴や権勢の誇示、あるいは富の象徴、地位の確保、財産の保全、有利な関係の獲得そして保持、友愛関係の継続など、精神的な利益を得るためであったと思われる。儀式的祭具として使用したのも、貝の持つ“^{ま か ふ し き}摩訶不思議”な霊的な力によって、これらの願望を遂げるためであった」（同、70ページ）。「後世、権力者の墓や遺跡の発掘により、この貝貨使用の風習は明るみに出たのである。貝は一般に、女性の生命力や生殖・豊穡を示

(6) この一文からも理解できるように、白井 [1997] は一般的な物々交換の問題点について論じ、物々交換の困難を克服するために貨幣が自然発生的に生じたとの考え方（以下、物々交換仮説と呼ぶ）について述べている。こうした物々交換仮説は、内外を問わず無数と言ってもよいほど存在する。だが、こうした仮説に対する反論も数多い。以下、そうした文献をいくつか紹介し、その問題点を指摘しよう。

ダルトンとデイビスはいずれも物々交換の存在を否定している。先ずダルトンは次のように述べている。「[物々交換の] 例として間違っているのは、広範な物々交換の状況が、時間や場所を問わず、かつて実際の世界の経済に現実に存在したと仮定することである、すなわち、市場交換は貨幣が使用されるようになるまで、かつて頻繁に行われ、量的にも重要である、ないしは自然的資源、労働、財およびサービスのかなり大きい範囲にわたって行われ、その重要な市場部門は貨幣が存在する以前に存在したと仮定することである」(Dalton [1982] p. 183)。「貨幣なき市場交換 (moneyless market exchange) という厳密な意味での物々交換は、われわれが確実な情報を持っているどのような過去ないし現在の経済システムにおいて、決して量的に重要ではなかったし、取引の支配的なモデルでもなかった。」(Ibid., p. 185)。「結論的に述べるならば、貨幣なき市場的交換は、市場的交換の貨幣的手段の生成に先立つ取引の支配の様式という意味では、一つの発展段階を画するものではない。物々交換は過去においても現代の経済的制度においても非常に広範に生じるが、それは物々交換を行う者による特別の理由のために用いられる常にマイナーな、散発的な、急場しのぎに用いられた取引である」(Ibid., p. 188)。デイビスもこう主張する。「物々交換の説明の大部分は、貨幣に関する現代の教科書に典型的に見られる基本的な事例を提供するだけになされてきた。これらの説明は、物々交換の不便を過度に強調するだけでなく、このミスリーディングで狭隘な、間違った見解でもって貨幣発生を基礎付け、他の要因を排除しがちであった」(Davis [1994] pp. 9-10)「(今日では) 専門家の多くの共通の認識は、物々交換が貨幣の起源や最も初期の発展における要因ではないということである」(Ibid., p. 23)。詳しくは、古川 [2018] を参照されたい。

すものと考えられている。また貝から想像されるものとして、「天然の要塞」,
「墓場」,「復活」,「女性器」があるとされる。特に“子安貝”と俗に呼ばれ
るタカラガイ類は、その典型とされる。子安貝は、古代中国では“生命力の
象徴”,あるいは“生命の源を連想させる”と考えられてきた。死者の霊の
不滅や復活を祈るため、死者の口にタカラガイを含ませたり(含貝),手に
握らせて(握貝)埋葬した。また、殷代の戦車と馬が埋葬されている車馬坑
から、タカラガイと青銅で飾られた馬具が発見されたのも、この証だといわ
れる。……このように、貝と人類との関わりの主要な部分は、交換の媒体と
して便利な貨幣としてよりも、貝のもつ呪詛的な力を利用して、富や権力を
獲得するための媒体であったと言える」(同、75-76ページ)。こうした記述
が示すように、子安貝(タカラガイ、寶貝)は形状が女性器に似ていること
から、多産・豊穡を祈ったり、死者の口中に含ませて死後の再生を願ったり
する呪術性を備えて副葬品として埋葬されたことは確かなようである。

以上のように、白井[1997]の分析は明晰で分かりやすいけれども、上に
引用したように、「大昔の原始社会の時代には、当然、貨幣は存在しなかつ
た。モノとモノとを交換する“物々交換”によって、人々は必要な物資を入
手してきた」と、いとも簡単に物々交換の存在を認めている。しかし、本当
に物々交換取引は存在したのだろうか。また「大昔の原始社会の時代」とは
一体、いつの時代を指しているのだろうか。意地悪い見方をすれば、白井
[1997]に展開された記述は単なる推論の域を出ず、厳密な考古学的(ある
いは歴史学的な)分析が不可欠であるように筆者には思われる。

ところで、古くから世界各国で貨幣として使われてきた子安貝あるいはタ
カラガイ(寶貝)というのは、古代中国ではどのような機能・役割を果たし
てきたのだろうか。この点で宮澤[2007]は具体的で分かりやすく、かつ非
常に貴重な指摘を行っている。彼はこう述べている。「中国貨幣史を振り返
るとき、寶貝から始めるのが普通である。寶貝とは温暖な海で産出する自然

古代中国の貨幣の起源

の貝で（淡水産もある）、青銅貨幣の出現する以前すでに貨幣として使われていたという見方が一般的である。宝貝の出土例は新石器時代から見られ、殷（前16世紀～前11世紀）・西周（前11世紀～前8世紀）時代に多くなり、春秋戦国時代にも出土する。いずれも南の海から遠く離れた内陸部に出土したもので、長い距離を移動していることから、何らかの意味で財宝と見なされていたものと考えられている。財宝と見なされる宝貝は、中国貨幣の起源の問題、あるいは中国貨幣の本源的な性格・機能は何かという問題と絡まっており、なかなか厄介である。そもそも宝貝が使用されだした新石器時代の文献史料を欠いているから、貨幣の一般理論を敷衍するか、もしくは考古学的方法から接近する以外に方法はないからである。周代になると、若干の文献史料が残されており、はっきりとしたことは言いにくいにしても、ある程度のことは言える」（宮澤〔2007〕3ページ）。

そして次のように付け加える。「従来の先秦貨幣研究を集成した黄錫全⁽⁷⁾は、周代の宝貨について16の用例を列挙している。『易経』から1例、あとは西周金文（西周時代の青銅器の銘文）である。それらによると、例えば大亀1匹が10朋（『易経』）、100頭が10朋以下、良馬1頭が30～50朋、奴隸一家が1以下、土地1田が7～8朋、玉璋1件が80朋、青銅製の簋（穀物を盛る器）1件が14朋、糸一束が50朋である。「朋」とは宝貝を数える単位で、1朋は10個である。これらの例から宝貝が価値あるいは価格を計量する機能を果たしていたことを確認できる」（同、3-4ページ）。そして司馬遷の『史記』、

(7) 黄錫全は、『先秦貨幣通論』（紫禁城出版社（北京）、2001年）を著した中国の研究者である。ここで先秦とは、中国の歴史区分で文字通り秦以前の時代（先秦時代）を指しているが、通常、春秋戦国時代を指すことが多い。『先秦貨幣通論』は、本文に引用したように、「従来の先秦貨幣研究を集成した」書物であり、先秦貨幣を網羅的・体系的に紹介したのみならず、著者のオリジナルな見解を打ち出した研究書としても第一級の書とされている。ただし、日本語の翻訳はなく筆者は読んでいない。

班古の『漢書』、許慎の『説文解字』といういずれも漢代の有名な文献の記事を引用して次のように述べている。「これらの記事は、青銅貨幣以前に寶貝があり、寶貝から青銅貨幣へ代わったこと、寶貝も青銅貨幣も商品流通を媒介する手段と認めていたことが分かる。後世の学者はこれら漢代人の認識を重視し、寶貝の存在を商品流通に結びつけて考えることが多いのである。例えば、先の黄錫全は新石器時代に既に寶貝が媒介する商品経済を想定している。しかし新石器時代・殷周時代・漢代を通じて、貝や亀の甲羅、青銅貨幣が同じ機能、すなわち商品流通を媒介する機能を有する財であるとは私には信じられない。新石器時代に貨幣が媒介する商品経済がどのようなものであるか私には想像できないし、また新石器時代から漢代までの間に社会・経済の仕組みは相当に変化したに違いないからである」(同、4-5 ページ)。

宮澤 [2007] はこう述べている。「寶貝の出土状況を見ると、何らかの意味で財であったことは確かである。ではどのような意味で財であるのか。最近、佐原康夫が重要な一連の研究を公にした。それによると、寶貝が主に出土する墓葬においてどのように副葬されているかという考古学的観点から考察すると、殷周から春秋戦国時代まで、呪術的葬具か装飾品として一貫した解釈が可能であり、貨幣として副葬された事例はないという。墓葬以外の出土例は少ない。先にあげた、土地と交換する玉器の価値80朋という西周金文の事例に着目すると、寶貝は玉器の価値を計量していることは事実だが、玉器と土地という特殊なものを当時の支配層に属する人々が交換しており、玉器・土地・寶貝の間に等価関係を設定すること自体、身分制的な行為と認められるとする。寶貝とは特定の身分の人が用いる「身分制的計算貨幣」であって、広く一般に用いられる貨幣と考えられないというのが佐原の結論である」(同、5 ページ)。

さらに宮澤 [2007] は次のように言う。「確かに価値の表示手段として機能することが、商品貨幣と結びつくとは限らない。そもそも寶貝は他の財貨

古代中国の貨幣の起源

と交換されたのではなく、土地と交換される玉器の価値を個数で表示したのに過ぎない。このような意味で、宝貝は商品と交換して流通を媒介する機能、すなわち流通手段（一般的交換手段）ではなく、個数でものの価値を表示する記号だった。しかも価値表示手段としても黄氏の挙例から知られるように、宝貝 1 朋（つまり10個）の表示する価値はきわめて高く、貝を細かく分割できない以上、あらゆるものに対して可能であったとは到底想定できない。単に個数でものの価値を表示するだけなら、何も宝貝でなく、石ころであってもよさそうである。しかしそうでなく、宝貝が使われたのは、その呪術性・身分性によるものだろう。「宝貝は周王が諸侯に下賜する財貨として用いたことも金文から知られている。機能で言えば、支払い手段であるが、やはり与えるものと受け取るものの身分と大いに関係していそうである。宝貝は、佐原の言うように、特定の身分の人だけが用いることのできる特殊な財貨であり、特定のものの価値を表示する手段、特定の身分にあるものの間での支払い手段として働いていたことが理解できる。宝貝は商品経済の展開における一般的交換物では決してない。ただ念のために言うと、この特殊な財貨である宝貝を貨幣と称することは可能である。貨幣機能を有するものを貨幣と称するなら、宝貝は貨幣である。ただ商品と交換する等価物と見なければよいのである。なお佐原は、『史記』や『漢書』などの記述に現れるような宝貝を商品経済を媒介する貨幣と見なす歴史観は、漢代に成立したと述べている。私はもう少し早いと思うが、文献ではっきり確認できるという意味で氏の意見に賛成である」（同、6 ページ）。以上のように、宮澤 [2007] は、古代中国の貨幣について従来以上に明確で体系的な見解を提示するのである。

さて上述の宮澤 [2007] が「佐原康夫が重要な一連の研究を公にした」という、その佐原康夫の研究の内容について少し立ち入って検討することしよう。佐原は「貝貨小考」と題する小論文において次のように述べている。彼は、殷・西周期の海貝（宝貝、タカラガイ）の社会的性格に関して以下の

ような見方を開陳する。「海貝は、台湾や海南島以南の温暖な海辺に産するが、その貝殻は中国北部内陸地帯の新石器時代の遺跡からも出土することがある。また同じ遺跡……では、胸に玉の飾りを着け、太股の間に36個のにほる海貝を副葬している。これらの被葬者は女性であり、海貝が饒豊・多産を祈る呪術と関係することが知られる」(同、22ページ)。そして、こう付け加えている。「この時代の中小規模の墓葬に最も特徴的に見られる海貝の副葬法は、被葬者の口の中に海貝を入れることである。玉器を死者の口に入れる場合、しばしば蟬の形に加工されることが知られているから、被葬者の口の中に入れられた海貝は、地下からの生命の再生を願う呪術的葬具であると思われる。被葬者の首や腰のあたりなど、身体に密着した位置から出土する場合も同様に解釈されよう」(同)。

佐原[2001]は以下のような見解を提起する。「考古学的な観点による限り、海貝は殷周時代から戦国時代まで、呪術的葬具あるいは装飾品として一貫した解釈が可能である」(28ページ)。「殷周から戦国時代に至るまで、海貝は呪術的葬具として、また呪術的装飾品として、途絶えることなく使われてきた。海貝はこの時代、新石器時代の一部の例に見られるような、女性に特化した呪術的装飾品ではなく、その使い方に性差が見られないことも、前提として指摘できる。これらの事柄には、どのような社会的意味があるのだろうか。……海貝の社会的価値には2つの側面がある。第1には、多産・豊饒を祈る呪術的価値。これは主としてその形と結びついている。第2には、南海の珍品としての稀少性。北中国の内陸部においては、何らかの手段で産地からもたらされるのを待つしかない。本物の海貝は、この2つの要素が不可分に結びついた結果として貴重な財宝となる。一方、この2つの要素が分離すると、その形を模したさまざまな倣製品が成り立つ。しかし墓葬での副葬を見る限り、棺の内部のように被葬者に密着した、呪術性の濃厚な場所では、本物の海貝が好まれる傾向がある。とはいえ、海貝の呪術的性格を過大

古代中国の貨幣の起源

評価はできない。殷代から西周中期ごろまでの副葬法において、被葬者の口の中や棺の内部に海貝を入れるのは、中小規模の墓葬に多く見られ、大型の墓葬は必ずしもそうではない。これは大型墓において、玉器がその役割を果たしているからである。また西周後期以降は、中小規模の墓においても、海貝に代わって石圭のような玉器の倣製品が主流になっていく。神聖さや霊力、また伝統性において、海貝は玉器に一步を譲る存在であった」(同、28-29ページ)。

そして、「貨幣」としての性格について次のように説明する。「価値の尺度として海貝が選ばれたのは、分けて数えても性質が変わらないという便利な性質を持っているからである。ただしここでは「朋」を単位としており、貝殻一つずつまで分割できたかどうかはわからない。集合名詞のように数えられた可能性は排除できないとすべきだろう。もちろん、海貝はここで直接に交換されてはいないし、物差しとして機能する際にも、その場に実在している必要はない。このような点を考慮すれば、海貝を価値の尺度となる貨幣とするだけでは不十分である。使う人の身分と、価値を計量する対象の両方を選ぶような、「身分制的計算貨幣」とでもいうべき存在だったと考えられる」(同、30ページ)。「当時の財宝の中で、分けて数えても性質が変わらないのは海貝だけではない。青銅も地金として秤量が可能であり、現に賞賜や罰金などの形で用いられている。その意味では、青銅地金も立派に「貨幣」たり得る。海貝が価値の尺度を務めたのは、対象が、もともと海貝と親縁性の強い玉器であったことも作用していると思われる。海貝や青銅地金が、時と場合によって「貨幣」として機能するのだとすれば、それは穀物や布帛など、ずっと後世まで現物として機能したものと、本質的に差がないことになる。このように西周時代の海貝は、きわめて特殊な意味で「貨幣」だったのであり、しかも他の現物貨幣と区別できるような、特権的な性格を持たない。したがって、貝貨は貨幣史に属すると言うよりも、むしろ貨幣前史に属すると

考えた方がよさそうである」(同)。

さらに、彼は次のように記述する。「海貝の持つ呪力は、本来は人間の生命に関するものだったはずが、その財宝としての性格から、その呪力を青銅器にも及ぼしていったのだと思われる。青銅礼器は単なる財貨ではなく、祖先の祭祀に用いる神聖なものであるから、これを守りことも墓葬内では重要なことだろう。しかし青銅器が、春秋戦国時代に次第に世俗化していくにつれて、これと結びつく海貝も、財貨の護符、あるいは一種の縁起ものとなっていったと思われる」(同、31ページ)。そして、「海貝は、本来は神聖な祭器としての青銅祭器を、呪術的な力で守護するものだったが、時代が降りるにつれて、次第に財貨の護符として世俗化していったと思われる」(同、32ページ)。

佐原[2001]は最後に結論としてこう指摘する。「西周中期の金文資料には、海貝は一種の身分制計算貨幣として、幾多の限定のもとにおいて「貨幣」として機能したのであり、これを当時の全社会にまで一般化して考えることはできない。秤量して用いられる青銅貨幣と同様、海貝も現物貨幣的な側面を脱しておらず、海貝を交換手段とする「貨幣経済の発展」は疑わしいとすべきである」(同、傍点は引用者)。ここで金文とは、青銅器の表面に刻まれた、あるいは鑄込まれた文字を指しているが、西周中期の金文とは、文字どおり、西周(B.C. 1070年頃～B.C. 771年)中期の金文を意味している。佐原[2001]の指摘は、こうした西周中期の時代において海貝(寶貝、タカラガイ)を一般的な交換手段、すなわち今日的な意味での「貨幣」とみなすには疑問があるというのである。以上の佐原康夫の「貝貨小考」という論文は、わずか40ページにも及ばない「小考」ではあるけれども、考古学的な観点から、西周中期の時代においては海貝を「貨幣」の範疇に組み込むことには難点があるという指摘は、西周中期時代の金文資料に基づく客観的な分析であるだけに貴重であると筆者には思われる。

佐原〔2001〕よりも一歩踏み込んで、江村〔2011〕は春秋戦国時代の最初の貨幣である青銅貨幣について考察・検討したうえで、以下のような結論を述べている。「中国における最初の青銅貨幣である尖首刀と空首布は、国家でなく民間による鑄造、発行である可能性が高い。まず第1に、これらの貨幣には国号など共通した統一的な文字もなく、文字の種類はきわめて多様であり、特定の文字の貨幣が排他的に流通していた形跡もない。第2に、これらの貨幣の出土、流通地域には強力な国家権力が不在であり、むしろ権力の空白地域と言ってもよい。そして第3に、これらの貨幣は実物貨幣の系譜を引き、権力を背景にせず生成した可能性が高い。すなわち、初期のこれらの貨幣は実物の工具、農具にきわめて近い形態を有しており、後のこの種の貨幣の展開から見ても、形態は具体的で抽象化は進んでおらず、民間での受容を容易にしたと考えられるのである」（江村〔2011〕141ページ）。すなわち、中国最初の青銅貨幣（尖首刀と空首布）には、①共通した統一的文字はなく、文字の種類も多様で、特定の文字の貨幣が流通した形跡がない、②貨幣の出土および流通地域は国家権力が不在で、権力の空白地帯である、③出土した貨幣は、国家権力を背景にするというよりも実物貨幣の系譜を引き継ぎ、その形態も具体的で抽象化の程度は低い。こうした理由から、民間の受容性が高いというのである。

ただし、古代中国で普及した刀銭と布銭の展開過程には大きな相違があるとされる。江村〔2011〕はこう指摘する。「後の刀銭と布銭の展開過程には明らかに分岐が見られる。刀銭の流通地域では国家による統一貨幣が生成する。一部、趙の領域では直刀のように都市の民間鑄造と考えられるものも存在するが、燕の領域では明刀、齊の領域では「齊太刀」三字刀のような、国家による統一貨幣が支配的となる。これに対して、布銭流通地域では国家の関与が想定される特殊貨幣が一部存在するものの、都市における民間鑄造が一貫して行われている。燕では、一部方足銭が鑄造されているが、明刀の鑄

造量が圧倒的に多い。尖足布、方足布をはじめとする平首布はほとんど三晋諸国の地名が鑄込まれており、出土地は一部燕の領域にも及ぶが、三晋諸国の領域が中心であり、三晋諸国の都市で鑄造、発行されたものと考えられる」(同)。

そして刀銭と布銭の分布状態が異なる理由ないし背景、それに両者の流通領域と発行主体について不明な部分が多いとして以下のように述べている。「この刀銭と布銭の分布は何に由来するのであろうか。注目されるのは、平首布の地名や出土地が戦国時代に都市の発達した三晋諸国と重なる点である。戦国時代における都市の発達は、都市遺跡、考古遺物、文献史料から山西省中部、南部、河北省南部、そして河南省北部、中部から東部、山東省西部にかけての韓、魏、趙の領域に集中している。この地域の都市の発達は、春秋中期以後の社会変動と密接に関係していると考えられ、布銭の生成と展開も都市の発達と連動していると思なされる。布銭は、洛陽を中心とする地域で、都市の経済を担った商人や手工業者によって商業、交易の必要から生み出され、三晋地域の都市の発達と都市間交易の活発化に伴って広く普及していったと考えられる。しかし一方、刀銭の生成と発行主体については不明な部分が多い。最初の布銭である尖首刀の流通地域は、都市の発達が見られない地域である。尖首刀は戎など北方系民族が漢民族との交易の必要から生み出した可能性があるが、なぜ燕の領域やその周辺地域だけで生み出されたのかは不明である。刀銭の流通地域である燕や齊の領域は、戦国時代になっても広範な都市の発達は見られない地域であり、都市の未発達により逆に強力な国家権力が発達する地域である。この地域では、都市による貨幣鑄造、発行には限界があり、貨幣は国家権力によって次第に把握されていったものと考えられる」(同、141-142ページ)。

上に引いたように、江村〔2011〕は、①古代中国における最初の青銅貨幣(尖首刀および空首布)は、国家ではなく民間による鑄造・発行の可能性が

高い、②刀銭の流通過程では、基本的には国家による統一貨幣が生成し支配的になるのに対し、布銭の流通地域では都市における民間鑄造が一貫して行われるなど、刀銭と布銭の展開過程には明らかな分岐が見られる。③こうした刀銭および布銭の生成と展開は、春秋中期以降の社会変動、すなわち都市の発達と密接に連動している。④刀銭の生成および発行主体については未解明な部分が多い、といった古代中国における貨幣の生成と展開のプロセスについて、具体的かつ体系的に指摘するのである。

ところで、『地下からの贈り物——新出土資料が語るいにしへの中国——』（中国出土資料学会編、東方書店、2014年）という書物の中で、以下のような興味深い内容が提示される。この書物は、戦国時代（先秦時期）における貨幣についての3万点に及ぶ文献史料から読み取れる重要なポイントとして、以下の4つを指摘している。

①最初に出現する貨幣は何か？

「古くは空首布や齊太刀を西周時代まで遡る最古の貨幣とする考えもあったが、現在では考古学的発見によって空首布と尖首布が最古の貨幣とされている。空首布は、山西省曲沃^{きょくよく}県で大型の原始的な平肩空首布が考古学的に春秋中期と認定できる形で発見されたことにより、平肩空首布は春秋後期に流通していたと推定されている。尖首刀も北京延慶^{さんじゅう}県の山戎^{さんじゅう}墓地から出土したことから、春秋後期には存在したことが明らかになった。現在のところ、これらより古い青銅貨幣は発掘によって年代の分かる形では確認されていない。平肩空首布の出土地は周の王畿である洛陽周辺の狭い地域に限定され、多種類の記号が鑄込まれているが、国名と思われるものは見当たらない。春秋後期、周王朝は内乱続きで貨幣を発行するほどの経済的力はなかったと考えられる。王畿を中心とする地域は、経済的都市が多数発達する地域であり、これらの貨幣は都市の有力者が発行した可能性が高い。尖首刀の方は、山西省や河北省の北部で出土する。この地域は春秋から戦国にかけて戎狄^{じゅうてき}など

北方牧畜民の居住地である。尖首刀の銘文も多種類存在するが、地名、国名とみなされる文字を有する貨幣が多数を占めるわけではない。尖首刀も北方牧畜民が経済的必要から民間で発行したものと考えられる。しかし、この地域は都市の発達した地域ではなく、彼らがなぜこのように早い時期に貨幣を発行したか謎である。中原農耕地域と北方遊牧民族との交易の必要や西方からの影響なども考えられるが、今後の検討課題である。なお、最初の青銅貨幣が民間で発行されたことは、民間の経済活動において一般民衆にも受容されやすい工具や農具など実用道具がモデルに選ばれたことから証することができるであろう」(74-75ページ)。

②方足布と尖足布は誰が発行したか？

これらの貨幣は戦国中期以後大量に発行され、すべて発行地の都市名が鑄込まれている。ほとんどの中国の研究者は、都市名が鑄込まれていても都市が所属する国家が発行した貨幣と考えているが、日本の研究者は、都市の商工業者が発行したとしている。歴史的に見て、貨幣は国家が発行するものとは限らない。これらの貨幣の出土地や地名から、その発行地は経済都市の発達した地域とかなりの部分で重なる。また、貨幣の重量は5グラム前後で軽量かつ極めて薄く素材価値と名目価値が一致しない名目貨幣(紙幣と同じ)であり、流通には経済的裏付けが必要である。都市の商工業者など経済的実力者が貨幣を発行したと考えても矛盾はない。また、一つの都市が多種類の形態の貨幣を発行している例や同一地名で文字の形が異なるものもある。さらに、地名の都市とはずいぶん離れた都市で鑄造の鑄型が発見される場合もある。国家が発行した場合、このようなことは起こり得ないだろう。これらの貨幣の出土地域、すなわち流通地域は、韓、魏、趙の三晋地域に重なるが、北方の燕の領域でも大量に流通している。燕の明刀銭が趙の北部で流通していることを考え合わせると、北方地域の特殊な経済状況を考える必要がある(75ページ)。

古代中国の貨幣の起源

③特殊な貨幣、橋形方足布と齊太刀の発行目的は？

これらの貨幣は、ともに大型で厚手で重量もあり、他の青銅貨幣とは明らかに異なる。齊太刀は40グラム前後、大型の橋形方足布は30グラムに達するものもある。また銅の成分比も大きく高品質の貨幣である。齊太刀の出土地域は齊の領域内、橋形方足布は魏の領域内でともに国内貨幣である。発行年代に関してはさまざまな説があるが、考古学的に考えて戦国中期であろう。橋形方足布には長文の銘があるものがあり、黄金との兌換比率が記されていると解されている。外国との交易のために発行されたとの説もあるが、主に国内で出土していることからして、そうではないだろう。戦国中期は魏が秦の侵略に悩まされる時期であり、最終的に東方に遷都せざるを得なくなる。この貨幣の発行都市の多くは秦の侵略に抵抗する前線にあり、魏が国家として裕福な都市住民から防衛のための軍資金を調達するために発行した可能性がある。齊太刀に関しては、一般流通貨幣とするのが普通であるけれども、背面の「三十」の数字は少額貨幣との換算率を示すものと考えて、大口交易の決算に用いられた小切手の性質を有するとする説もある。この貨幣の発行された時期は齊の威王が対外攻勢に出る時と重なり、軍資金調達が目的であった可能性がある。民間の経済活動の必要から発行された青銅貨幣は、戦国中期になると、国家の必要から特化した貨幣が発行されるようになる（76ページ）。

④中国歴代王朝の貨幣はなぜ方孔円錢であったか？

秦が天下を統一すると、貨幣は秦で発行されていた方孔円錢の半両錢で統一されることになった。その後、歴代王朝の発行した青銅貨幣は、文字は重量から元号（年号）に変化するが、基本的には変わることはなかった。この貨幣の形態は、周辺の朝鮮、ベトナム、日本にも影響を与えた。戦国時代には上述のように極めて多様な貨幣が発行されているが、円錢以外は形が複雑で携帯に不便であり、何枚かまとめる場合も面倒である。穴空きの円錢なら

ば紐に通すだけでよい。しかし、方孔円銭は円孔円銭から発展したものと考えて、貨幣をまとめてヤスリで整形する際に差し込む棒を方形にして回転を止めるため、方孔になったとする説がある。現在では、円孔円銭と方孔円銭は考古学的に戦国中期のほぼ同じ頃に出現したと考えられ、方孔円銭は天円地方の観念（天は円形、地は方形とする宇宙観）に基づくものとされている。天円地方の観念は、支配者の統治理念とも合致しており、国家発行の貨幣として理想的であったと考えられる（76-77ページ）。

以上のように、出土文字資料、考古資料としての青銅貨幣は、文献資料を補うだけでなく、文献史料から窺うことができない歴史事実を浮かび上がらせてくれる。中国古代では、文献史料は基本的に編纂された二次資料であるのに対して、出土文字資料や考古資料は同時代の一次資料として別の性質をもっているからである。歴史資料は、両者が補いながら進められるべきものであると考えられる。

Ⅱ 古代中国における貨幣の誕生

前節では、古代中国、とりわけ殷、西周、春秋戦国時代を通じた貨幣の出現と、貨幣経済の進展状況について概観した。これを受けて本節では、貨幣誕生の経緯をもう少し詳しく検討するとともに、主として子安貝（寶貝、タカラガイ）が貨幣として用いられた事実について、それが用いられた地域や背景などについて展望することにしよう。

この点でまず参考になるのは、次のような西谷〔1998〕の見解である。「貨幣の誕生——寶貝と厭勝銭——」と題するこの論文では、古代中国における貨幣の起源について、子安貝が貨幣として用いられた時代や地域、背景などについて「はじめに」冒頭でこう問いかける。「貨幣というのは一体いつごろから人間の生活の場に現れたのだろうか。中国では新石器時代終わり（紀元前約2000年前）から商時代（前17世紀末～前11世紀）にかけて、黄河

古代中国の貨幣の起源

上流域や中流域など各地の遺跡から宝貝が出土するようになることから、既に商の時代には宝貝が貨幣として用いられたのではないかという説もある。西周時代（前771～前249年）になると、銅で作った布貨（布幣）・刀貨（刀幣）・鉋銭^{えんせん}などさまざまな形態の貨幣が出現する。

秦の始皇帝（在位前247～前210年）は、半兩銭と呼ばれる円形方孔の形式の銭をはじめてつくり、旧来の布貨、刀貨などの使用を禁止して銅銭による貨幣の統一を図り、造幣権を国家の手に収めた。これは前漢時代にも引き継がれ、漢の武帝（在位前141～前87年）が発行した五銖銭^{ごしゅせん}は、その後約800年間にわたり中国の貨幣として流通した。新を建国した王莽^{おうもう}（在位8～23年）は大泉五十・契刀・貨布などのいわゆる王莽銭を鑄造したが、新は15年間で崩壊したので、王莽銭は一時的なものに過ぎなかった。唐代になると、高祖（在位618～626年）が開元通宝を新鑄し、その開元通宝は中国の国内のみならず、広くアジアの諸国にも流通し、日本における最初の銭貨である和銅開珎の発行にも大きな影響を与えた」（西谷〔1998〕 iii ページ）。

そして、貨幣が登場した理由や背景、地域などについて次のように説明する。「貨幣というのは何のためにつくられたのか。普通に考えれば、貨幣とはものを買うためのものであり、交易・交換の媒介物として大変便利なものである。その始まりは、誰でも欲しがるもの、例えば穀物・布帛・家畜・農具・塩・武器・皮などで、それらは物品（商品）貨幣と呼ばれている。物品貨幣は、誰でも欲しがるものではあるが、持ち運びが不便なうえ、分割しにくく、しかも長期保存にも問題がある。そこで、その不便を解決するために貨幣が発明されたのだと考えられている。しかし貨幣というのは、ただ単にそのような経済的理由によってつくり出されたものではないのではないのか。中国を中心とする東アジアの貨幣の歴史を概観すると、貨幣はそのような経済的図式にのっとった経過をたどってつくり、使われ始めたのではないと言わなければならない。宝貝は、貨幣としてまず登場したと考えるより、墓

に副葬する富のシンボル、またはマジカルな力をもつものとして収集された可能性が高い。また周代には、多いもので数百本もの布貨を入れた甕が、郊外の農地から時折発見される例が報告されており、貨幣と土地との何らかの関係を意識した行為と想像され、日本の中世に見られる埋納銭・備蓄銭を彷彿とさせる。中国の支配地域に広く流通した五銖銭にも、貨幣の面に吉祥文字を鑄込んだ厭勝銭（まじない銭）や、銅以外の材質でつくった玉質の五銖銭が発見されている。これらの貨幣を魔除けとして利用した例が文献からも窺われる。唐代にも、開元通宝に鼈甲^{べっこう}でつくった厭勝銭が存在し、寺の鎮壇具として利用された例が発見されている」（同、v ページ）。

そして古代中国において宝貝が登場した時代や動機などについて以下のよう述べている。「宝貝は新石器時代の晩期（紀元前約3000～前2000年）の遺跡から見つかっている。……しかし、中国における宝貝の本格的な利用は商（殷）時代になってからであろう」（10-11ページ）。「商時代の人々にとって、宝貝は稀少価値をもつ財産的意味だけではなく、それを死者の口に含ませたり手に握らせたりすることから始まり、時代が下がるにつれて馬具や衣服などにも使われて多様化する。しかしいずれも死者儀礼に伴う点では共通している。また卜骨や金文から窺えるように、宝貝は国家的事業としては安陽〔中国7大古都（北京、南京、杭州、西安、洛陽、開封、安陽）の一つ。商代後期の都——引用者〕一カ所に集められた。おそらく当時の王にとっては、王と家臣との政治的紐帯を維持するために、宝貝の稀少性のもつ財産的意味と呪術的意味の二面性を利用する必要があったのだろう。……宝貝は、財宝の意味と葬制に伴う重要な地位を占めていたが、流通経済を背景とした貨幣的意味合いは希薄であったと考えられる」（17-19ページ）。以上のように、西谷〔1998〕は宝貝が登場した背景・原因と、そうした背景・原因が時代の推移とともに変化してきたことを明らかにするのである。

山田〔2000〕も分かりやすく体系的であり、書名どおり、『貨幣の中国

古代中国の貨幣の起源

古代史』を理解するにふさわしい。この書物の「はじめに」、著者はこう述べている。「日本古代に発行された銭に対する関心の高さに比較して、その手本となり、また源流であった中国の貨幣については、あまりに情報不足ではないかという感じを私は常々持ってきた。……1949年の新中国成立以降おびただしい量に達し、数多くの新発見が相次いでいる古代中国の貨幣については、一般的な書籍はまったくない。すなわち、唐の「開元通宝」銭以前の中国貨幣史に関する新展開について、総合的に解明し、平易に叙述する試みはなされていないのである。これは、あまりに膨大な発掘報告量のためそれらを整理するだけでも多大な労力を費やさねばならないことと、多方面にわたる貨幣問題の複雑さという2つの理由によって、古代中国貨幣史の通史的な叙述が困難であったことによる」(山田 [2000] 4 ページ)。「古代日本の貨幣の源流に対する確かな認識を得ることは、日本・中国両地域、さらには東アジア全域の貨幣の理解を深めることにつながるだろう。今こそ古代中国の貨幣史を叙述する時期ではないか、と考えるに至ったのである」(同, 7 ページ)。こう述べて山田 [2000] は、古代中国貨幣史を執筆する困難と、古代中国の貨幣についての通史を執筆しようと考えた動機、そしてそれによって改めて古代中国貨幣の多様なあり方を提示し、貨幣とは何かについて、そして貨幣に対する意識・観念などを検討しようとした動機ないし目的を語っている。以下、これらの問題を少し詳しくフォローすることにしよう。

山田 [2000] は、古代中国において貨幣とは何であり、貨幣が使用された時期はいつであり、貨幣の機能および貨幣使用の目的は何かなどについて、次のように述べている。「中国社会で貨幣が使用され定着して以降は、……貨幣をあらゆる場所に行き渡らせた。貨幣使用は春秋時代(紀元前770～紀元前481年)に始まり、戦国時代(紀元前481～紀元前221年)には貨幣経済がほぼ定着し、貨幣はもはやなくてはならない存在になった。価値尺度・支払い手段・価値貯蔵などの貨幣の主要な諸機能に対応した貨幣取引が見られ、

金や銅貨を主とする貨幣に対する人々の欲望も顕著になっていた。……しかし、中国では、貨幣そのもの、あるいは貨幣的なものは、もう少し早い時代からその姿を現しつつあった。殷代（紀元前15世紀～紀元前11世紀）の墓中から大量に発見され、以後の時代にも見られる南海産の子安貝がそれである」（同、11-12ページ）。「殷では、亀の腹側の甲羅や牛の肩甲骨が最高神「帝」に伺いをたてる占卜に用いられたが、それら亀の腹甲や牛の骨に刻まれた占いの文字を甲骨文字という。また西周（紀元前11世紀～紀元前771年）では、青銅器の銘文が主要な文字資料となるが、この青銅器銘文を金文^{きんぶん}という。甲骨文には「貝六百を取る」「貝二朋^{ほう}」などとあり、西周金文にも「貝五朋を賜う」などとあるように、子安貝は互酬・贈与に用いられ、その単位として朋^{ほう}があった」（同、12-13ページ）。「殷文化と三星堆文化^{さんせいたい}の例を考えれば、この南方からの子安貝は、豊作を祈願し、死者の再生・安寧を祈念するもの、また祭祀の供物、あるいは宝飾などに不可欠なものとして宝物視され、支配者間で互酬・贈与されたという推測が可能となる。銅の地金、奴隸、その他の宝物なども、そのような機能を果たしたであろうが、それら実用的な使用価値あるものよりも、より一段と高次の観念性をもって、子安貝は神聖視、宝物視、貴重視されたものと思われる」（同、13-17ページ）。「中国の華中以北では容易に入手できないという稀少価値が、子安貝をますます宝物視させたことはいうまでもない。中国の人々は早くから玉や珠（パール）を珍重・愛好してきたが、子安貝もそのような中国の人々の好みとも関わっていたことは十分推測できる。そして、このような殷（三星堆）に見られる子安貝の存在形態は、神聖で稀少であったがゆえに、骨や銅などによる倣製品^{ほうせいせい}の登場を促すことにもなる。実物の貝とともに倣製品も一定の価値をもって互酬され、また埋葬されたということは、社会での神聖視、価値評価が定着していたことを示すであろう」（同、13-17ページ）。「このような中国古代の子安貝のあり方を見たとき、貨幣とは共同体内・共同体外的交易を前提として一般

古代中国の貨幣の起源

的使用価値とは別に生み出されたものであるとして、「非市場社会における互酬と再分配」理論を提唱したカール・ボラニーの唱える貨幣理解が、当てはまる側面があると言えよう⁽⁸⁾（同、17ページ）。「文化諸現象においては、多くの場合、支配者間での文化・規範・意識等々が長い時間をかけて社会全体に広がりを見せてゆくのを考えるとき、この上から下への影響を古代中国の貨幣についても考慮すべきであることが分かる。すなわち、まず殷代の支配者間で子安貝の「交易」「互酬」は開始されたであろうが、支配者間の互酬、神聖視が一段と進み、「朋」字に示されるような一定の単位での互酬が定着し、それが次第に価値表示の役割を果たした。こうして古代中国では、実用性のあるものではなく、高い次元の神聖性を付与されていた子安貝こそが中国最初の物品貨幣（価値尺度となる品で貨幣的機能を有するもの）となった。このように言えるであろう。これが、古代中国の貨幣・交易・経済に関わる文字に「貝」が使われた理由となる」（同、17-18ページ）。

さらに山田〔2000〕は次のように付け加える。「貝だけではない。亀甲（亀の甲）も同様の機能を果たした可能性が高い。……戦国時代の楚では、金貨を亀甲の形にしていた。……貨幣として亀甲が選び取られたについては、原初的に神の意志を問う神聖なものであった亀甲についての強固な記憶、あるいは伝統からきたものとみてよい。……本来的に、子安貝同様あるいはそれ以上に亀甲は神聖なものであった。この神聖な亀甲が互酬・献納され、高い価値を付与されていたことは容易に推測がつく。前漢の司馬遷が武帝代（在位紀元前141～紀元前87年）後半に完成させた歴史書である『史記』には、亀甲が長江でとられ、漢中央に献上されて、占い担当官署の太卜^{たいはく}が管理して、漢高祖^{りゅうほう}劉邦^{きしつ}の廟の亀室（亀甲を納める室）に、神宝として収蔵されていたことが述べられている」（同、19ページ）。「このような古代の記憶が貨幣に

（8） ボラニーについて詳しくは、古川〔2017〕69-71ページおよび同〔2018〕第V節を参照されたい。

影響を与えた例として、西アジア以西における金と銀についても見るができる。非常に古い段階では、銀の方が金よりも価値が高かった。これは、自然金の形で手に入る金に対して、一定の精錬技術を必要とする銀が入手困難であったからである。そして、この強固な記憶の存在が、銀価格よりもはるかに金価格が高くなった時代においても、金貨の価格表示に銀の価格表示法がそのまま用いられた理由である（同、20ページ）。「中国の青銅器時代は殷以前から始まり、春秋時代、遅くとも中期からは鉄器使用が始まる。この間、支配階層の間では銅製農耕具も使用されたようであり、このような銅器が贈与・互酬の対象となり、さらには貨幣へと転化を遂げて布銭となった。同様に銅製の小刀も、互酬物から貨幣への転化が考えられる。あるいは青銅そのものが貴重視されていたため、鑄造によって大量生産された鉄器の使用とともに、青銅農耕具・小刀は実用的意味よりは抽象的・象徴的価値表示機能を有するようになったのであろうか。いずれにしても、西周時代に貨幣化を開始した貝と亀甲のような神聖性・霊力の強いものではなく、より実用的・世俗的なものが物品貨幣となり、ついで金属貨幣へと転化したことになる」（同、25ページ）。「最高神「帝」や祖先神がきわめて大きな役割を果たして、祭政一致的政治が行われた殷代以降、漢代までは依然として古代的神々への信仰は厚かった。しかし、全体としてみるならば、次第に神と人間の間は離れ、周以降の最高神「天」と人間の間も離れてきた。また、神話も早くから断片的になって、多くは失われるか、あるいは本来神話の神であったものが聖人とされるなどの人間化^{こうむ}を被った。このように、中国古代においては、神聖性・宗教性に対して、世俗化・人間化がより強まるという動向があらゆる面にみられる。貨幣についても、神聖なものから実的なものへと世俗化が進んだと言えるだろう」（同、26ページ）。

山田〔2000〕はこう述べている。「古代中国貨幣の発生段階に見られた特色とは一体どのようなものだったのか。それは貝・亀甲のもつ神聖性・霊力

古代中国の貨幣の起源

であった。その記憶は、夷狄^{いてき}に対して「華」^か、「夏」^かという同一文化圏に属する意識を共有した漢族の文化的伝統となった。これがいわば意識下の記憶として、以後中国の強固な伝統を形成する。また、この最初の貨幣が有した神聖性・靈力は、貨幣が死者の安寧や復活を保証する力として記憶され、やがて墓中銭として、あるいは後代の紙銭として死者への手向け、供養に用いられることになる」(同、27ページ)。このように、中国貨幣の発生段階の特色が要約されるのである。

以上に紹介した日本の文献からも理解できるように、古代中国の貨幣の特色として、神聖性・靈力・呪術性・稀少性などが普遍的価値を持ち、君主・支配者層に互酬性のある商品として選択された。また春秋戦国時代の各種銅銭の発生の場合も、互酬的慣行の中で一段と貨幣化が進展した。さらに一步を進めて、商業交易の中で銅貨が一般的等価物として用いられるようになった可能性があることなどが挙げられる。すなわち、発生段階で貨幣とされたものが背負った文化的伝統、あるいは社会的慣行としての互酬の関係などが、中国の貨幣を考察する上で重要な役割を果たしたと考えられる。以上のように、古代中国のあらゆる面に古代から大多数を占める漢族を中心とする中国固有の文化が影響を及ぼしてきたと言えよう。亀甲を選択したのも、方孔円銭の形態を選択したのも、古代中国固有の文化的影響が大きな影響を及ぼしたと推定されるのである。

Ⅲ 浜田耕作と古代中国の貨幣

「近代考古学の父」と称される浜田耕作は、『通論考古学』(1984)の序文冒頭で次のように述べている。執筆の時代的背景もあり、文語体的記述をベースにして理解するのに困難な表現が多いけれども、浜田の意図を生かし、表現のニュアンスを壊さないためにも、そのまま記すことにする(ただし、難解な漢字には筆者がルビを付けている)。「世に考古の趣味を有し、その研究

に携はるもの漸く多くを加ふるも、考古学の目的と、其の研究法を説きて、
之が科学的指針を示せる著作至って少なし。是れ単り本邦において然るべき
のみならず、欧州学会に在りても亦たその感を同ふす。妄に空義を論じて実
際を顧みざるは、固より吾人（われわれ）の取らざる所なりと雖も、斯学
（この学問）の本質を明らかにすることなく、其の研究法を尽さずして、資
料を取り扱い、論議を進むるの結果、折角の努力もその価値を減じ、学術的
使命を完うせざるもの多きに終わるは、深く惜しむ可しとなす」（序文 1 ペー
ジ、傍点は引用者）。この一文には、考古学をマスターするには考古学の目
的を明らかにし、その研究法を樹立することが重要であり、「その研究法を
尽くさずして、資料を取り扱い、議論を進むる」だけでは、目的を達成でき
ないという浜田耕作の考古学に寄せる決意と熱い思いがよく現れているよう
に思われる。

『通論考古学』第 1 編序論の「考古学とは何ぞや」と題する第 1 章におい
て、浜田は「考古学」の定義として、イギリスのニュートン（Thomas
Newton）の論文「考古学の研究に就いて」（On the study of Archaeology,
1850）に基づいて、考古学的資料を以下のように 3 つに分類する。①口述的
（oral）、すなわち風俗・習慣・口碑（言い伝え）、②記載的（written）、すな
わち文書・文献、③記念物的（monumental）、すなわち遺物・遺跡。これら
の 3 つの分類によって、人類の一切の過去を研究する科学であるとのニュ
ートン流の考え方がある。しかし浜田によれば、こうしたニュートンのような
見解は、考古学の範囲を最も広く解釈しようとするものであり、「分化・発
達せる他学の範囲を侵さんとするものある」（浜田 [1984] 10 ページ）こと
から、以上の 3 つの資料の中で、③の遺物・遺跡を資料とするもののみを考
古学（Archaeology）の範疇に属するものとみなすとして、「考古学は過去人
類の物質的遺物（に拠り人類の過去）を研究するの学なり」（Archaeology is
the science of the treatment of the material remains of the human past）と言

はんと欲す」(同、11ページ。傍点は原文のとおり)と述べている。それでは「人類の物質的遺物」とは何か。これについて浜田はこう定義する。「過去人類の残せる一切の空間的延長を有する物件を指すものにして、史学の主として取り扱ふ所の文献的資料と対するものなり。すなわち、自然科学と対立する文化科学(Kulturwissenschaft)の研究方法中、文献学的方法(die philologische Methode)と共に、他の一半をなす可きもの、すなわち、この考古学的方法(die archäologische Methode)に外ならざるなり」(同、傍点は原文のとおり)。

以上のように、『通論考古学』の第1章では「考古学とは何ぞや」と題して主として考古学の定義について述べ、第2章では「考古学の範囲および目的」について説明する。この第2章では、「考古学の専ら活動す可き舞台は、人類の物質的遺物ありて、文献全く備らざる時代より、よし之を存するも、未だ豊富ならず、特に同時代の文書欠乏せる時代にありと云ふを妨げず。而も斯くの如き時代は、各国各民族によりて一定せず。又、確然たる年代を以て之を劃すること難く、且つ其の必要も無し。所詮は各国に於いて所謂「古代史」に属する部分、及び其の以前の部分は、考古学の最も力を尽くす可き領域にして、文献的資料の欠乏するに従ひ、益々考古学的研究法を応用す可き必要を増加するものと言ふ可し」(同、14-15ページ)。そして考古学の時代的区分として、先史考古学(Prehistoric Archaeology)と歴史考古学(Historic Archaeology)の2つがあり、さらに地理的あるいは民族的区分として、日本考古学、支那考古学、印度考古学、亜米利加考古学など、それぞれその地方における考古学的研究を言うと述べている。

第3章では「考古学と他学科との関係」として、考古学と化学(Chemistry)、地質学(Geology)、人類学(Anthropology)、史学(History)との関係を語るのである。浜田によれば、「凡そ人文およに関する科学にして、他の人文科学と何らかの関係を有せざるもの無く、これら関係諸学科の造詣きに俟つこ

と無くして、研究を遂行し得べきもの有る可^べからず。殊^{とく}に考古学の如きは学問は物質的資料を取り扱ふ性質上、単に他の人文諸学のみならず、自然科学等の方面にも互^{わた}りに密接なる関係を有するを以て、これら関係諸学の知識を要すること、最も大なるを見る。固^{もと}より一人にして各種の学問に深き造詣あること難きを以て、その特殊の研究は各専門家に委託するの他なしと雖^{いえど}も、或る程度迄^{まで}の知識と之に対する興味とを共有することを要す」(同、22ページ)。浜田はこのように述べて、考古学は他の人文科学はもちろん、自然科学などとも密接な関係をもっているから、これらの関係諸学についてもある程度の広範な知識と興味をもって造詣を深めることが不可欠であるというのである。

以上紹介したのは、『通論考古学』第1編序論の一部に過ぎない。この書の第2編は資料と題して、「考古学的資料の性質」(第1章)、「考古学的資料の所在と収集」(第2章)、「遺物とその種類」(第3章)、「遺跡とその種類」(第4章)について記述し、第3編は調査とのタイトルのもとで、「考古学的発掘」(第1章)、「発掘の方法」(第2章)、「調査の方法(1)」(第3章)、「調査の方法(2)」(第4章)について説明する。第4編は研究という名のもとに、「資料の整理鑑別」(第1章)、「特殊的研究法」(第2章)、「時代の決定」(第3章)、「考古学と文献」(第4章)について述べられている。さらに第5編は後論として、「考古学的出版」(第1章)、「遺物遺跡の保存」(第2章)、「遺物遺跡の修理」(第3章)、「博物館」(第4章)について語られる。この『通論考古学』の内容もさりながら、浜田耕作がいかに関「考古学と他学科との関係」および「考古学は過去人類の物質的遺物(に拠り人類の過去)を研究する学問である」と喝破するように、単なる空理空論(浜田の言葉によれば「空義」)に終始するのではなく、その理論を支える実証的分析が必要であると強調するのである。さすがに、浜田耕作が「近代考古学の父」と呼ばれるだけのことはあり、その分析のポイントをよく把握しているように

思われる。

ところで、以上の『通論考古学』に対する^{つのだ ぶんえい}角田文衛の「解題」はなかなか興味深い。角田の『通論考古学』に対するコメントとして特に興味深いのは次のような見解であろう。「本書がわが国において体系的に考古学全般を説いた最初の概論書として……出版されたのは、大正11年（1922）7月のことであった。とくに浜田耕作博士は、数えて42歳、京都帝国大学教授であり、日本で唯一の考古学講座の担当者であった。……この不惑を越えたばかりの浜田博士がものされた本書が……不死鳥のようになお生氣を保っているのは、次に述べる2つの理由によるものと思量される。第1は、40歳そこそこでありながら、博士の考古学上の視野が極めて広いことである。もともと博士は、日本考古学や日本の美術史の研究から発足されたが、卒業論文では、ヘレニズム文化の東漸という風に次第に視野を広めて行かれた。そして京都来住の後、……朝鮮、満州、中国の考古学的研究にも志向された。そして大正2年（1913年）から同5年にわたるヨーロッパ留学では、特にギリシャ・ローマ⁽⁹⁾考古学、エトルスキ考古学、エジプト考古学等の研鑽に打ち込み、関係遺跡の見学、踏査にも励まれたのであった。当時のヨーロッパには、そして現在においてすらこれほど広い視野をもち、かつそれらを研究する能力をもつ考古学者は求められなかった。……また日本の考古学者で欧米に留学した人もその後何人かはいたけれども、浜田博士のような態度でヨーロッパやオリエントの考古学を考究し、これを自己の考古学体系の樹立に役立てようとい

(9) エトルリア (Etruria) とは、イタリア中部のトスカーナ地方の古名であり、古代ローマ時代以前はエトルリア人（ラテン語ではエトルスキ (Etrusci)）の本拠地として紀元前6世紀頃に最も繁栄したが、紀元前3世紀頃にローマによって滅ぼされた。エトルリア文明は、ローマ文明が栄える前のイタリア半島で開花した。18世紀になり、エトルリア人が残した大量の絵のある壺や銅、銀、錫などの金属器、多彩な壁画を持つ墳墓などが次々と発掘され、大きな注目を集めるようになった。エトルスキ考古学は、こうしたエトルリア文明が残したさまざまな遺跡を対象とする考古学を言う。

とした人はほとんどいなかった。『通論考古学』は、東西の考古学に通曉した浜田博士のような学者によって叙述された点が特筆されるのであって、この種の考古学者は、いまなお欧米には求められないのである」(角田 [1984] 360-361ページ)。この記述には、京都帝国大学時代に浜田耕作の指導のもとに考古学を専攻し、数多くの考古学関連の書物を残した角田文衛 (1913-2008) の、浜田に寄せる敬愛の念がよく表れているように思われる。ついでに言えば、角田文衛は、上に引用した「考古学は過去人類の物質的遺物 (により人類の過去) を研究するの学なり」という一文についてこう指摘する。「これは、浜田博士がイギリスの Hogarth (D. G. Hogarth, 1862~1927) が与えた定義 (Hogarth, D. G. (ed.), *Authority and Archaeology: sacred and profane*, London, 1899, p. vii) をそのまま採用されたのであって、博士の独創にかかるものではなかった。ただ『通論考古学』が規定した考古学の概念が向後の日本の考古学会に及ぼした影響は甚大であった」(同, 365ページ)。以上が本稿の前書きである。

さて、この節の主たる対象である論文「支那古代の貨幣に就いて」(浜田 [1930]) に焦点を移そう。これは、わずか15ページの短編に過ぎないけれども、日本で最初に考古学の分野を対象とし、漢文や独文が混じり合い、しかも専門用語が使われるのみならず、その対象とする世界は広くかつ深いといった特色がある。浜田耕作の数多くの著作の中で最も短く、かつ最も難解であると思われる論稿であることは間違いない。その内容のみならず、用語それ自体も難解なものが少なくない⁽¹⁰⁾のである。それでは、「支那古代の貨幣に就いて」というユニークで難解きわまる論稿に立ち入ることにしよう。以下で

(10) 本文を先取りしてしまうが、用語に関する難解な例として、妄誕、馴鹿、埃及、西藏、比律賓、亜刺比亞人、波斯亞、阿弗利加、希臘を挙げることができる。順に「でたらめ」、「トナカイ」、「エジプト」、「チベット」、「フィリピン」、「アラビア人」、「ベルシャ」、「アフリカ」、「ギリシャ」と読む。しかし、浜田耕作の「支那古代の貝貨に就いて」(1930) では、これらについて何の説明もなされていない。

は、「支那」という言葉を例外として何の修正も施さず、そのままを引用することにする。⁽¹¹⁾

-
- (11) 浜田耕作の「支那古代の貝貨に就いて」という小論文に代表されるように、第2次世界大戦以前は中国のことを「支那」と呼ぶのが一般的であった。例えば、『世界大百科辞典』（1972年）には「支那」についてこう述べられている。「黄河・揚子江・珠江の流域を包括する極東の一大地域。およそ清朝のシナ本部18省の地域に当たる。北はモンゴル・東北地区、東は黄海・東シナ海、南は南シナ海・インドシナ半島、西はミャンマー・チベットに境する。その語源は諸説あるが、前3世紀の末にだいたいこの地域を統一して一大帝国を建てた秦（しん）の名が、その国威の隆盛に伴い四辺に言いふらされ、秦が滅び漢が代わってからもさらにその名は広く西方にも伝わり、それがなまって Sina, Thina などとなり、近代の China（英語・ドイツ語）、Chine（フランス語）、Cina（イタリア語）などといったものをいうのが最も妥当な説と考えられる。インドでもこの地域を Cina と呼んだが、それが漢語に翻訳されて〈支那〉、〈脂那〉などの文字で表記された。〈シナ〉は純粋に地名であり、〈中国〉にはやや国家の意味が含まれており、シナには中国もあり、中国でない国もあった」（434ページ）。

次に『広辞苑（第7版）』には、支那という言葉について以下のように解説している。「支那（シン（秦）の転訛。外国人の中国に対する呼称。初めインドの仏典に現れ、日本では江戸中期以来第2次世界大戦末まで用いられた。戦後は〈支那〉の表記を避けて多く「シナ」と書く」（1317ページ）。「支那」についての説明はこれだけであるが、ついでに広辞苑（第7版）に説明されている関連用語として、「支那学」、「支那事変」、「支那・チベット語族」にも触れておこう。それぞれ、「支那学：中国の言語・文化・歴史などを研究する学問。19世紀末以降日本でも発達。中国学」、「支那事変：日中戦争に対する、当時の日本側の呼称」。「支那・チベット語族（Sino-Tibetan）：西はカシミールから東は中国全土をおおい、南はタイ・ミャンマーを含む地域の諸言語。シナ語派（中国語など）・チベット・ビルマ語派（チベット語・ビルマ語など）の2学派に分けられる。孤立語であることに特徴」となっている（傍点は引用者）。いずれにせよ、日本を代表する辞書には、単純に支那＝中国という意味で用いられ、「支那」という言葉に特別な意味が込められていない。しかし、現実にはそうではなかったようである。終戦直後の1946年（昭和21年）、GHQ（[米陸軍]総司令部）の管理下にあった外務省は、日本の主要なマスコミに対して「支那」と言う用語を止めるように通達を出し、それによって日本のあらゆるメディアにおいて「支那」を「中国」に統一するという名称変更が実施されたのである。その背景を探りその理由を明らかにすることは難しい。簡単に言えば、外務省の通達が直接の契機とはなったものの、その背景には日本が日清戦争（1894～1895年）に勝利した際に、日本の民衆が熱狂して自国の勝利と相手の敗北を祝い、そのことが結果として「支那」から「中国」への名称変更を促した、すなわち支那という言葉が日清戦争を契機に一種の差別語として受け止められ、そのことへの大

浜田耕作は次のように述べている。「中国において三皇五帝時代⁽¹²⁾に、早く金属貨幣の存在せしことを説くものゝ、妄誕^{でたらめ}なるは、今更論難するの必要を見ず。羅振玉氏が周以前を以て貿易時代となし、周以後列国に至りて始めて金属貨幣の発生を承認せるは、大体において正鵠を誤らざるの見と言ふ可し。而して金属貨幣の発生以前、氏の所謂貿易時代^{いわる}に於いて、一方に貝貨なるものゝ行はれしことは、従来学者の一般に唱道せし所なるが、羅氏に至りて、更に明確なる提言^かを為し、且つ貝貨の遺品に就きて多少の記述を試みたり」(浜田 [1930] 203ページ)。浜田はこう述べたうえで、中国古代の金属貨幣の発生以前に用いられたという貝貨の世界に踏み込んでゆく。

彼はまず羅振玉所蔵の貝貨について次のように言う。「昨年図らず羅振玉氏の京都に来住するあり、親しく其の収蔵の貝貨を見、之に関して幾分詳細の談話を聴くことを得たるを以て、余輩（私）は左に之を紹介すると同時に、少しく私見を付加せんと欲す」(同、204ページ)として、中国古代の貝貨に関心を寄せた契機を説明した上で、羅振玉所有の貝貨——その中心は骨製の子安貝 (cypraea moneta) である——について以下のように述べている。「此

きな反発が「支那」を「中国」に変えるという名称変更実施の引き金になったと推測される。ただし、これはあくまでも推測の域を出ないことを了知していただきたい。

- (12) 三皇五帝時代とは、古代中国の伝説時代の8人の帝王が統治した時代であり、三皇と五帝に分かれ、三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つとされ、伝説上は理想の君主とされている。この伝説では、最初の世襲王朝である夏より以前の時代とされている。
- (13) 羅振玉 [1866~1940] は、中国近代の考古学者であり、政治家でもある。清朝に仕えたが、辛亥革命を避けて娘婿の王国維とともに日本に亡命。かねて親交のあった内藤湖南、狩野直喜らのいる京都に7年間滞在して、多くの日本人学者と交流をもち、史学の研究・著述に専念した。帰国後、一時、宣統帝(溥儀)の教育にあたるが、満州国成立後は参議、監察院長などの要職を歴任する一方、金石文、甲骨文、木簡などの研究にも従事し、金石学、考証学の第一人者として知られる。とくに殷墟出土の甲骨文字の研究に努力し、殷文化の解明に努めたほか、敦煌発見の文書の研究にも傾注し、敦煌学の基礎を築いたとされる。

古代中国の貨幣の起源

等の貝貨は即ち羅氏が周以前恐らくは商代の遺物とするものにして、固より精確なる時代を積極的に肯定すること難しと雖も、余輩は之を以て周以前の遺物とするに何等の不穩当なるを見ず。其の外貌よりするも頗る古色を帯び、半ば化石的状态を示し断じて偽古の品に非ず^{あら}」(同、206ページ)。「例へば、欧州石器時代に於けるマグダレニアン(Magdalenian)⁽¹⁴⁾期には、多数の骨器出で、^{トナカイ}馴鹿、旧象等の骨牙に画像を劃けるものすらあり。其の他、^{エジプト}埃及及び西亜(中東)等に於いても、有史以前の骨牙製品の発見、頗る夥しきものあり。また羅振玉氏が過般河南省彰德府の殷代の遺墟に於いて発見せる商周時代の古銅器の模様と全く同一の装飾模様を刻せる骨製品、其の他貞卜文字(甲骨文字)を刻せる亀骨牛骨等に之を參攷^{さんこう}するも、余輩は獨り此の貝貨に向かつて疑問を挟むの必要を認めざるなり」(同、206ページ)。「殊に羅氏所蔵の貝貨が子安貝(cypraea moneta)の形状をなせる事は、頗る吾人の意を得たるものにして、装飾的貝貨として広く諸人種間に行はるゝものゝ、殆ど大多数が此の子安貝の外に出でざるを見るなり。而も天然の貝が欠乏其の他の理由によりて、他の物質を以て模造せらるゝことも、其の例少なからざる所にして、貝の産地に遠く、海岸を離れたる中国古代文化の中心地に於いて、此の事例を見るは寧ろ怪しむに足らざる現象と謂ふ可し」(同、210ページ)。浜田はこう述べて、羅振玉所蔵と同様の貝貨が広く存在した事実について次のような3つの根拠を挙げている。①周以前の遺物であり、その古色を帯びて半ば化石的状态を示している外見からして決して偽物ではない、②欧州石器

(14) マグダレニアン期(Magdalenian)期とは、後期旧石器時代(17000年前～12000年前頃)末期を指し、この時期には、フランスを中心とする西ヨーロッパ一帯にマドレーヌ文化(Madeleinan)が花開いたが、このマドレーヌ文化はそれ以前のオーリニャック期(42000年前～32000年前頃)に栄えたオーリニャック文化(Aurignacian)を母体としていると推定されている。ラスコー(Lascaux)やアルタミラ(Altamira)などのよく知られた洞窟壁画の多くは、このオーリニャック＝マグダレニアン期に描かれているとされる。

時代のマグダレニアン期には、トナカイや旧象の骨牙などに画像を記したような多数の骨器が発掘され、エジプトや中東などにおいてもおびただしいほどの有史以前の骨牙製品が発見されている、③羅振玉氏が殷代の遺跡において発見したのと同じの装飾模様を刻んだ骨製品・その他の貞卜文字（甲骨文字）を刻んだ亀骨・牛骨などが存在する。これらの事実を考慮すると、子安貝に代表される骨製の貝貨が存在したことに対して「疑問を挟むの必要を認めざるなり」と浜田は指摘する。

さらに浜田は、アジア各地において子安貝が貨幣として使用されている状況を以下のように述べている。「雲南地方に於いては、13世紀の頃なお印度より輸入せる貝を貨幣として使用せしことは、マルコポーロの吾人に告ぐる所なり。また西藏（チベット）に於いては、12世紀に及びて始めて子安貝に代わり銀を使用し、印度のベンガルに於いては、少なくとも西紀（西暦）1世紀以来、子安貝を貨幣とし、19世紀にもなほ處々に於いて使用せられ、モルジブ及びラッカディブ諸島より輸入せらる。⁽¹⁵⁾後印度諸国（インドシナ半島）に在りては、暹羅に於いて前世紀に至る迄^{（16）}は、比律賓群島（フィリピン諸島）にもその風を見る。斯の如く亜細亜の東南部に於いて、子安貝は盛んに貨幣として使用せらるゝも、西方に至るに及びて漸次此の習俗の減少するを認む。されどなほ装飾及び貿易品として用ゐらるゝものは決して少なからず」（同、211ページ）。そして浜田は、アラビア、コーカサス、トルキスタン、欧州、中東、アフリカについての発掘についても触れ、「此等の事実に徴するも、子安貝が其の古くより使用せられしことを証するに足らん」

(15) ラッカディブ諸島 (Laccadive Islands) は、インド南西岸沖、スリランカ南端とモルディブ諸島南端を結ぶ線の北、モルディブおよびインド領ラクシャディープ諸島の海域にある島々より成っている。このうちラッカディブ海 (Laccadive Sea) は、インド南西岸沖、スリランカ南端とモルディブ諸島南端を結ぶ線の北、モルディブおよびインド領ラクシャディープ諸島の東側の海域である。

(16) タイ王国の旧名。

(同) と言う。

「子安貝が貨幣としての効用をなすも、その基づくところはすなわち装飾の目的に使用せらるゝを以てのみ。新ボメロニア (Pomerania: バルト海沿岸地方の呼称) および付近の島嶼においてデワラ (diwarra) と称して *nassa callosa* ⁽¹⁷⁾ 貝を以て作れる小円板を、糸に貫ねて一連となせるものを装飾として使用すると同時に、同種族間の貨幣 (Binnengeld) として通用するが如きは、装飾品即ち貨幣たるの好例にして、其の他諸地方に於いて使用せらるゝ、子安貝の殆ど全部も亦、此の類のものたるを認める可く、山東および河南兗見の遺品が一個、若しくは二個の小孔を有するは、畢竟、此の装飾品として糸を以て連結する必要上より出でしものなる可し」(同、213ページ)。

以上の検討の結果として、浜田耕作は次のような仮説を提供する。「吾人は茲に一個の仮説を提供する機会を得たり。即ち中国秦漢以来行はれたる円形方孔の銭は、……子安貝の如き貝殻を、紐を以て連絡して首飾り其の他の装飾となせるより出るものにして、蟻鼻銭は即ち貝貨と円銭との中間を繋ぐものならむとの説なり」(同、213-214ページ)。「吾人は周初以前に子安貝が通貨の用途をなし、次いで貝を模するに銅を以てせる、所謂蟻鼻銭なるもの

(17) *nassa callosa* 貝というのは、ムシロガイ科 (*nassariidae*) に属する巻き貝の一種であるとされている。しかし、筆者が貝類に関する辞典などを調べてみてもあまり明確ではない。

(18) 円形方孔の銭とは、古代中国において、銭と呼ばれる中心に穴の空いた硬貨が作られた。銭の形は円形方孔であり、全体が円形で、真ん中に空いた穴が四角の形(方孔)をしたものである。円形方孔銭の例としては永楽通宝がよく知られている。永楽通宝は、中国の永楽帝(明朝第3代皇帝)の代より鑄造され始めた銅製銭貨であり、日本では室町時代に日明貿易や倭寇によって大量に輸入された。この永楽通宝は、まさに円形方孔銭の典型的な例であると言える。

(19) 蟻鼻銭とは、古代中国の戦国時代の楚で使用された青銅貨幣のことであり、その形が蟻の頭部に似ているところから、その名前が付いたとされている。

(20) 円銭とは、蟻鼻銭と同じく古代中国の戦国時代の青銅貨幣の一つで、円形に丸か四角の穴の形をしていることに由来する。秦を中心に黄河中域一帯で流通したとされる。

出で、之より更に円銭の発生を説きしも、当時貝が中国に於ける交易の唯一の媒介品たりとは信ぜず。熱帯地方の如き衣服を要せず、農業の域にも達せずして天然の産物に棲息する未開の民族に於いては、身体の裝飾品が唯一の有力なる媒介物なるを得べけんも、商周時代の如く既に農業時代に進み、中国の如く衣服を必要とする土地に於いては、此等の生活状態の必需品たる他の媒介物の存在は、寧ろ当然の事情なりと云ふ可く、例へば農具、布帛、軽便なる利器の如き蓋し其の最も普遍的のものたる可きは推察するに難からざるなり。而して此の実際の農具（鋤）或は布帛よりの発生したるものは即ち布銭にして、小刀より起れるものは即ち刀銭なる可く、斯くて吾人は少なく

(21) 殷（紀元前17世紀頃～紀元前1046年）は、現在の河南省を中心に黄河下流域に栄えた考古学的に実在が確認されている中国最古の王朝である。この殷は、商ないし商朝とも呼ばれる。紀元前11世紀に紂王（帝辛）が現れて暴政を行い、周（紀元前1046年～紀元前249年）の武王によって滅ぼされた（殷周革命）。商周時代とは、この商（殷）と周の2つの時代を指している。一説には、商人という言葉は商（殷）人が国の滅亡した後の生業として各地を渡り歩き、物を売っていたことに由来するとされているが、確かなことは分らない。

(22) 浜田 [1930] (216ページ) より引いた「布泉」は、明らかに「布銭」の誤りである。これを前提にして説明しよう。布銭（布貨ともいう）とは、鉄の農具の形を模した中国の青銅貨幣のことである。有肩（けん）で、刃先が2つに分かれるか、内側に湾曲している。これを「布」と称したのは、その音が農具の「鑄」に近いからだともいわれているが、まだ定説はない。刀銭より少し早く現われ、だいたい春秋の後半から戦国の末まで用いられた。また後に王莽は、周制に帰ることを理想として一時布銭を復活した。布銭のうち「空首布」と呼ばれる最も古い形式のものは、柄をさしこむ首の部分が空になっていて、そこに目釘穴（めくぎあな）が開けられている。この空首布について、方肩尖足布（ほうけんせんそくふ）・方肩方足布・円肩方足布・円肩円足布・三孔布などが現れた。布銭には、ほとんどすべて地名が鑄出されているが、それらを調べてみると、韓・魏・趙のいわゆる三晋方面のものが多く、つまり、布銭の流通範囲はほぼ三晋を中心とする地域であったこと、ならびにその鑄造権は国家の統制を離れて地方都市に分散していたらしいことがわかる。以上は、『世界大百科辞典』（1974年版、平凡社）に拠っている。

(23) 刀銭とは、古代中国で使用された刀の形状に似た青銅貨幣の一種であり、柄の先に丸い環を付けた小刀の形を模した銅器である。春秋戦国時代の齊、燕、越などで使用されたとされる。戦国時代の中国の貨幣は大きく分けて金貨と銅貨に分類されるが、銅貨には布銭、刀銭、最初は円孔をもち、後には方孔（四角い穴をもつ）

古代中国の貨幣の起源

とも中国に於いては三種の貿易媒介品より三種の貨幣の発生せるを認めずんばあらざるなり」(同、216ページ)。ここに言う三種の貿易媒介品とは、蟻鼻銭、布銭、刀銭であることは明らかである。

以上、浜田耕作の「支那古代の貨幣に就いて」と題する短い論文についてその概要を紹介した。この浜田論文は、わずかな字数の中に考古学的な観点から古代中国の貨幣の起源について考察している。論文のタイトルから明らかなように、古代中国の貝貨、その中心である子安貝の貨幣としての役割についてである。漢文が、英語が、ドイツ語が登場し、日本語それ自体も漢文調の難解な表現が多用されている上、中国山東省や河南省の遺跡から発掘された貝貨はもちろん、チベット、インド・ベンガル、インドシナ半島やフィリピン諸島、さらにはアラビア、ペルシャ、コーカサス、トルキスタン、北ドイツ、イギリス、スカンジナビア、中東、アフリカ、ポメラニアなどの各国・各地域から貝貨としての子安貝が発掘された歴史的事実を指摘するのである。よくもこれだけの広い世界的視野と歴史的視野から、貝貨としての子安貝に焦点を当てたものと感嘆するばかりである。確かに先に触れたように難解な論文ではあるけれども、内外を問わず、古代中国の貨幣起源説に関する最も古い、しかもポイントを突いた論文ではな⁽²⁴⁾かろうか。これまで古代中国における貨幣の起源についてもっぱら論じ

この形態の円銭を方孔円銭という)をもつようになる円銭、そして子安貝の伝統を継承した銅^{どう}貝の4種類があるとされている。この指摘は、山田勝芳著『貨幣の中国古代史』(朝日新聞社、2000年)24ページ、30ページに負っている。

- (24) ここで対象とした浜田耕作著「支那古代の貝貨に就いて」(1930)は、わずか15ページの論文であるが、彼には実にさまざまな膨大かつ多彩な著作がある。その一部をリストアップすると次のとおりである。『日本文化の源泉』(1924および1984年)、『日本原始文化』(1933年)、「朝鮮における考古学的調査と日本考古学」(『日本民族』1935年所収)、浜田青陵(青陵は耕作の号)著『東亜文明の黎明』(1939年)、『日本美術史研究』(1940年)、『東洋美術史研究』(1942年)、「日本原始文化」(岩波講座日本歴史(国史研究会編)1933年所収)、「朝鮮における考古学的調査研究と日本考古学」(東京人類学会編『日本民族』岩波書店、1935年所収)、『東亜文明

てきたが、これに対して日本における貨幣の起源についても興味深い関心の対象となろう。お膝元の貨幣の起源については、意外ではあるけれども、あまり知られていないのではなかろうか。というより筆者の思い違いかもしれないが、体系的で精緻な考察・分析がなされていないように思われて⁽²⁵⁾ならない。今後の検討・分析に大いに期待したいものである。

の黎名』(1939年),『日本美術史研究』(1940年),『東洋美術史研究』(1942年),『百済観音』(1969年),『日本文化の源泉』(『論集 日本文化の起源Ⅰ:考古学 小林行雄編』1971年所収)『通論考古学』(1984年)などである。ついでに、浜田耕作の生い立ちも紹介しておこう。浜田は、1881年(明治14年)大阪府岸和田市に生まれる。1889年(明治22年)、第三高等学校(現在の京都大学総合人間学部)に入学する。同校を卒業して1902年(明治35年)、東京帝国大学文科大学史学科に入学。同大学では美術史を専攻し、1905年(明治38年)に卒業して大学院に進む。1909年(明治42年)、京都帝国大学文科大学講師に就任(同年、野村琴寿と結婚する)。その後、欧州に留学して考古学の研究を続ける。帰国後は京都帝国大学考古学教室の初代教授に就任。梅原末治、末永雅雄、小林行雄らを見出し、考古学における京都学派を形成する。従来の日本の考古学的手法に欧州の考古学研究方法を取り入れ、さらには中国および朝鮮半島を含むアジアの遺跡を調査するなどして、日本の考古学研究の発展に大きな寄与をしたとされる。1907年(明治40年)には京都帝国大学総長に就任。1938年(昭和13年)逝去。

- (25) 市村[1939]の「支那上代文化の研究——特に貝文化と玉文化とに就いて——」と題する論文も興味深い。市村讀次郎は、この論文の冒頭で次のように述べている。「中国上代の文化が黄河の流域に発達したことに就いては議論はないが、この文化が如何なる民族によって産出せられたのであるか、単に黄河流域に居住する民族によって自然に発生せられたのであるか、それともその民族は他方より移住し来つたものであるか、或いは単に他の方面に住する民族からその文化の影響を蒙つたのであろうか、これ等は極めて重大なる問題で、今も猶正確なる断安(結論)を下すは困難なことであろう」(27ページ)。「言語の系統から観察して中国上代の民族及びその文化は北方及び東北との縁故は割合に少くして寧ろ西方及び南方との関係が比較的多いのではないかと考へられる」(28ページ)。だが、結論としてこう述べている。「この貝文化の全盛期は恐らく殷の時代であらうがその余波は少くとも周の中世頃まで及んだと見て差支ない。けれども殷末には既に玉文化の台頭があり、これが貝文化と対立するやうになって来たことは殷墟の甲骨文の中に宝の字が存するの^上で推測することが出来よう。……その後周の時代になって玉文化の勢が全盛を極め貝文化は遂にこれが為めに圧倒せられるやうになって来た。これは殷に代わつた周室が西方から起り来つたことに最關係があらう」(49-50ページ)。

以上の市村[1939]に続いて出石[1943]の研究も興味深い。出石誠彦は「支那

おわりに

本稿では、春秋戦国時代を中心とする古代中国の貨幣の起源について、いくつかの観点から検討・分析した。中国考古学の扉を開き、「中国考古学の

古代史研究の趨勢と説話考察の意義」と題する論文において、主に「中国古代史研究の趨勢」を記述している（なお浜田〔1930〕および市村〔1939〕論文同様、出口〔1943〕においてもタイトルを除いて「支那」を「中国」に変えている）。^① 出石はこの論文のはじめに、「中国古代史の冒頭に当たつて、逢着する問題で、然も人類学或は人種学の自然科学的研究の進展に待つ最も大なるは漢民族の起源問題であつて、此漢民族が何れの土地より移動して來たものか、或は然らずして漢土に起源を有するかなどの大問題は容易に解き難い謎であるのみならず、軽々に憶測を加へ、もしくは大胆に結論を下すべからざる至難の問題である」（出口〔1943〕28ページ）と述べている。そして、「率直に余の所信を披歴すれば、科学的研究の本質は常に結論は正確な論証によつてのみ提示せらるべきであるから、民族の起源問題の如きは極めて広汎に渉る大なる問題であり、軽々に武断〔武力を背景にして強引に政治を行うこと——引用者〕の憶測を加ふべき性質のものでなく、是くの如き研究が学界の一角に進展するに至つてから今尚ほ日子〔日数——引用者〕極めて浅いのであるから、今こそ或は遺跡に埋藏されてゐる人骨の調査に、或は生体の大規模なる測量調査に正確なる資料の提示を急ぐべきものと確信する」（同、33ページ）と加えている。「スウェーデンのアンダーソン（J. G. Andersson）氏が招聘せられて活動するに及び……〔氏は〕発掘の事に従ひ多数の石器、土器を得、然も搬出人骨は漢民族の祖先のもの」と推定せられるに及んで、漢民族が中国の地に於いて石器時代を経過したもとなる事寸毫の疑を挟む余地なきに至った。而して一度び石器が注意の焦点と為るや最近数年旧石器時代の遺品と思はしき遺物も採集に勉められ、漢民族の石器時代問題の解決がほとんど断案〔最終的な判断——引用者〕に近づいたことは中国古代史の究明上看過すべからざる現状にある」（同、34ページ）。もう一つ注目されるのは、近代の中国考古学界最大の功績とされる河南省の殷墟発掘である。「近代に於いて殷墟が問題となり、識者の注目を惹くに至つたのは、清の光緒25、26年（1898、1899年）の頃、河南省湯陰県安陽河南方の鉄道工事の際、黄土層の中より亀甲獸骨の碎片其他古器物等の遺品が出土して学界の注視を集めてからのこと」（出石〔1943〕、36ページ）であるとされている。「殷墟の遺物につき今日最も意義あるは亀甲獸骨文〔いわゆる殷墟文字〕と思惟されるから」（同）であり、「亀甲獸骨文研究の進展如何は古代史に志す者の特別の注目を要することである」（同、37ページ）うへ、「かゝる所謂殷墟文字の研究は歴史記録以前の文字の資料として大なる意義があることには異論がない」（同、37-38ページ）ということになる。出口〔1943〕は、以上の一文をこう結んでいる。「殆ど未開拓の暗黒に閉ざされた観のあつた中国古代史が日に日に黎明の明るさを迎へつつある」（同、59ページ）。

パイオニア」とされる J.G. アンダーソンは、子安貝（寶貝あるいはタカラガイとも呼ばれる）が人類の歴史に特異な役割を果たしたという。すなわちアンダーソンによれば、古代中国で出土する子安貝（およびその模造品）は、副葬品や葬送儀礼あるいは護符としても用いられてきたが、子安貝が大きくクローズアップされたのは、それが貨幣としての役割を果たしてきたことによるとされている。彼は、殷代には子安貝は貨幣として最も一般的で、その後、この貝殻は金属製の模造品に代わり、さらに時代が下がると、青銅貨幣に代表される金属貨幣が主として用いられるようになったと主張する。

古代中国、なかでも春秋戦国時代は、中国の長い歴史の中でも注目すべき激動の時代であった。この時代の大きな特色の一つは、従来の青銅器製造技術が高度に発達して鉄製農具が出現し、牛を使って畑を耕す牛耕農業が出現したことである。牛耕農業の出現・普及は華北の農業生産力を飛躍的に発展させ、その農業生産力の発展を土台にして商取引の発展を促した。そして商取引の発展は、商取引を円滑にする度量衡、貨幣、文字の全国的な統一をもたらした。そうした古代中国の貨幣の発展を対象として、「近代考古学の父」と称される浜田耕作の、古代中国の貨幣の起源を子安貝に求める独創的な考え方があったと言えよう。

なお注25の最後（46ページ）に、出口〔1943〕は「殆ど未開拓の暗黒に閉ざされた観のある中国古代史が日に日に黎明の明るさを迎えつつある」（59ページ）と述べている。もう80年ほど以前の記述であるが、現時点に立ってみると、中国古代史は遺跡・遺物の発掘や採集、さまざまな歴史的事実の分析・究明などの蓄積に伴って着実に発展し、その全貌を明らかにする最終段階に差しかかっているのではないだろうか。あくまでも門外漢に過ぎない筆者の漠とした感想である。

参考文献

（以下に引用した文献については、必ずしも翻訳に正確には従っていない場合がある。

古代中国の貨幣の起源

また、原文献が当用漢字でない場合や旧仮名遣いで表示されている場合は、それを当用漢字や現代仮名遣いに改めた場合がある)

Andersson, J. G. [1934] *Children of The Yellow Earth*, London (J. G. アンダーソン『黄土地帯』(完訳新版)六興出版, 1987年).

江上波夫 [1999]『江上波夫文化史論集 2 東アジア文明の源流』山川出版社。

出石誠彦 [1943]「支那古代史研究の趨勢と説話考察の意義」(『支那上代思想史研究』藤井書店, 所収)。

市村瓊次郎 [1943]「支那上代文化の新考察——特に貝文化と玉文とに就いて——」『支那史研究』第43巻第10号。

江村治樹 [2011]『春秋戦国時代青銅貨幣の生成と展開』汲古書院。

佐原康夫 [2001]「貝貨小考」『研究年報 第45号』(奈良女子大学文学部)。

国立歴史民俗博物館編 [1998]『お金の不思議』山川出版社。

中国出土資料学会編 [2014]『地下からの贈り物』東方書店。

白井祥平 [1997]『貝』(I)法政大学出版会。

西嶋定夫 [1981]『中国古代の社会と経済』東京大学出版会。

西嶋定夫 [1997]『秦漢帝国：中国古代帝国の興亡』講談社学術文庫。

西谷 大 [1998]「貨幣の誕生——寶貝と厭勝錢」『お金の不思議』(国立歴史民俗博物館編)山川出版社。

『浜田耕作 [1930]「支那古代の貝貨に就いて」(『東洋学報第二巻第二号』269-270ページ(『東亜考古学研究』所収)。

浜田耕作 [1984]『通論考古学』雄山閣。

平山朝治 [2006]「貨幣の起源について」(『筑波大学経済学論集』第55号所収)。

古川 顕 [2017]「アリストテレスの貨幣起源説」『甲南経済学論集』第58巻第1・2号。

古川 顕 [2018]「クナップの貨幣国定説」『経済論叢』第192巻第1号。

古川 顕 [2018]「イネスとケインズの貨幣論」『甲南経済学論集』第58巻第3・4号。

古川 顕 [2018]「原始貨幣と貨幣の起源」『甲南経済学論集』第59巻第1・2号。

古川 顕 [2019]「貨幣の起源と貨幣の未来」『甲南経済学論集』第59巻第3・4号。

松崎寿和 [1974]『中国考古学概説』学生社。

柳田國男 [1967]「海上の道」(『海上の道』筑摩書房所収)。

宮澤知之 [2007]『中国銅銭の世界——銭貨から経済史へ——』思文閣出版。

山田勝芳 [2000]『貨幣の中国古代史』朝日新聞社。